俳　句　雑　誌

水　明

２０２３　４月号

令和五年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六巻第四号

《今月のかな女》

目かり時童話聞く子を膝に抱く

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

かな女が浦和へ移ったのは、昭和三年十一月であるが、この句が詠まれたのは同年春なので、この場所は、消失する前の柏木の家ということになる。かな女の膝に抱かれているのは大正十五年に浦和の石関家から養子に迎えた博さんで、三～四歳の幼児である。読んでやっている童話は、桃太郎や金太郎などの日本昔話なのか、それとも、アンデルセンやグリムの西洋童話か、興味がわく。

（鬼之介・註）

水　明

第1111号

―華の一句―

臘梅咲くジーナ・ロロブリジーダ逝く

森下山菜

思春期の頃、日本や外国の映画女優に憧れたことが懐かしく想い出される。気品があって美しいうっとりする女優が何人かいて、恋人になってくれたらと果敢ない夢を描いていたものである。掲句の作者も同様で、意中のひとが何人かいて、その中の一人がジーナさんであったのだろう。今年一月十六日、95歳で華やかな人生の幕を閉じた彼女に贈った追悼句である。

（鬼之介・推薦）

水明

令和５年
４　月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
笑ふ不動（作品）　永野史代　6
本郷界隈（近詠）　大村節代　7
春遊（近詠）　町野広子　8
風琴　※雪欄作家近詠鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　田寺玲子　永野史代　十倉和子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　森本早苗　松井由紀子　梅澤佐江　ほか　19
季音「花」（同人作品）　原田秀子　保坂翔太　曲淵徹雄　ほか　24
『水明誌』を繙く　小久保佳世子　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30

水明集

梅澤輝翠　越田栄子　菅原卓郎　ほか　33

水明集作品評　山本鬼之介　44

水琴窟（水明集二月号鑑賞）　池田雅夫　48

山紫集　50

鼓笛集（同人作品）・私の一句　56

水明の記事他誌転載　59

「水明忌」に集う　井口俊晴　60

水明例会報・各地句会報　62・65

水明全国大会のご案内　70

水明全国大会兼題句募集　71

若狭句碑めぐりバスツアーのお知らせ　72

風声・発展基金御礼　73・64

後記　74

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

笑ふ不動

山本鬼之介

胴上げの着地を飾るいぬふぐり

天平の御代を思うて蓬摘む

賓頭盧に溜まる暇なき春埃

破顔せる不動明王春の夢

嫁入り舟通ひし川の水温む

初蝶を招く鼻欠け地蔵尊

春障子開くる礼法小笠原

帰りゆく男勝りの小白鳥

本郷界隈

永野史代

寒明けの大樹は音を響かせて

絵馬に絵馬重ねて合格祈願かな

悴んで見るもの全て遠のけり

たましひを持つてゆかれる雪の白

まなうらは暗き白なり雪の夜

診察室に昇汞水色の春夕焼

再会は春のあたたかさうな日に

眼科の受診で都心へ行くことが多い昨今、地下鉄を出ると眩しいようなビルの林立、幾つもの病院が立ち並ぶ。本郷三丁目の交差点に、「本郷もかねやすまでは江戸のうち」の立札が見える。小間物屋で以前はよく買物をした。本郷の古地図の包装紙が気に入っていた。本郷通りを赤門、正門、農学部の先へと歩くと、某大学の供養塔の寺があり、紫黄先生も眠っておられ、掌を合わせた。近くには八百屋お七の比翼塚があった。お七と小性の恋仲の話が浮かぶ。受験シーズンで賑わう湯島天神、その先は上野へと続く。勝海舟が市民が食べたいと言う要望を伝え、今も店を続けている壺屋最中、煎餅屋等々楽しい地域だ。

「湯島より新花町へ初蝶々」

かな女の句が頭をよぎる。私は初蝶のように軽やかにこの界隈を飛んでみたい。

春遊

大村節代

山は春善男善女ぞろぞろと

春の寺男坂とや息ぎれす

松の輪から覗く遠景春の空

風に舞ふスカーフ手ぐる春よ春

ふくらみし桜の花芽そこここに

春遊いよよ足裏の悲鳴あぐ

一万を超えし歩数や春の旅

上野の山は、改装の終わった東照宮と牡丹園そして動物園のパンダに釣られて、人が溢れていた。

上野清水観音堂は京都清水寺に倣って造営されたという。歌川広重の描く、春の景「上野清水堂不忍の池」に登場した月の松を再現したといわれる、松の木の枝で作った小さな輪がある。覗くと不忍の池の弁天堂がちらっと見えた。ありがたや！いい旅だった。

風琴

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　　町野広子

◇紅葉の火（一月号）　大橋廸代

朝もみぢ珠数屋四郎兵衛しんかんと
ナビ冷まじ「カーブ注意」を執拗に
眼底にスカイラインの紅葉の火

念願の新車が届いた。ご長女の運転で予てより決めていた高野山へ、お守りを戴きに出発する。早朝の珠数屋四郎兵衛は、静かに佇んでいる。此処には多種多様の珠数が揃い、筆者も娘に買い求めたのを懐かしく思い出す。無事にお守を賜り、スカイラインへ向かう。ナビには「カーブ注意」が止まず流れる。全山全道それは見事な紅葉に包まれ、心の栄養をたっぷり浴びる。眼底には火のような紅葉が残る。

店の名は「まあ入らんせ」野紺菊
小半時待たされ鹿さしむかご飯

さあいよいよ昼食。選んだ店はユニークな店名の「まあ入らんせ」。仏の山高野山を巡って来られた人々に、優しくほっこりする場を提供して下さる。霊場巡りの地では、普通の家庭の方々も温かいご接待をして下さるとか。仏の山のお膝元でも例外ではないのであろう。評判のこの店は混み合っていて、小半時（約三十分）待ち、待望の鹿さし、むかご飯にありつく。待った分何倍も美味である。
充実した作者の一日を共に堪能させて戴いた。

◇一句一遊（一月号）　椎野美代子

懐に寝釈迦眠らせ山眠る
あの頃のままの土蔵や雪女郎

広大な自然の懐にゆったり抱かれ眠る大きな寝釈迦。その山も深い眠りの中にいる。寝釈迦とは涅槃像の俗称であり、春の季語ではあるが、掲句では「山眠る」の季語が全てを包み込んでいる。久々に訪れたこの場所、この土蔵は、あの頃のままに自分を待っていてくれた。雪の降り続く中懐かしさで時を忘れてしばし佇む。タイムスリップの心地がする。

鰭酒の鰭の半転皆既食
ロイヤルブルーのインクこぼるる冬の晴
紗一師の名乗りをここに冬満月

あぶったフグやタイの鰭に熱燗が注がれ、えも言えぬ香味が楽しめ、酒呑みには堪らない一品。コップの中の鰭が半転したのを見逃さない作者。「皆既食」との関係に魅力を覚える大人の一句である。若い頃流行した万年筆。今又、秘かにペンを使う事が見直されているらしい。ロイヤルブルーと冬晴は爽やか以外の何物でもない。「晴れ男」代表の紗一師。何処かの句会での懐かしい一場面。選ばれた句に作者が「紗一」と名乗りをあげた。一瞬どよめきが起り、選者も昂揚感に包まれる。季語が動かず精神が研ぎ澄まされる。

◇舞扇（二月号）

星野和葉

衣擦れの音孔雀舞ふ大襖
乾杯につづき熱燗天井画

ホテルでの踊りの会に友と参加。会場の重厚なつくりに先ず大いに感動する。舞台には孔雀の描かれた大襖が設えてあり、観客の衣裳や舞台裏に控える人々の幽かな衣音が伝わって来る。会席料理を楽しみながらの席で先ずは乾杯。その後に届く熱燗。ふと見上げれば天井には見事な彩色が施されている。歴史あるホテルは、内も外も威容を誇る。

篠笛の冴ゆる響きや舞扇
金太郎と山姥の悲話冬を舞ふ
舞人の指の先まで灯の冴ゆる

会場の照明は暗めに設定され、篠笛の繊細な音色が流れるといよいよ舞台が始まる。場内は食器の音も止み静寂に包まれ、舞扇が華麗に翻る。源頼光の四天王の一人坂田金時（幼名金太郎）は怪力で知られ居り、相模の足柄山に住んだ山姥の子と言われ、熊や鹿、猿を友として育った。母子の悲話が舞の世界で表現されて引き込まれる。言葉を発しない舞の世界では、指先、首、目線、足、腰など全身を使い表現する。特に指先をしなやかに使う事が重要。袖に置かれた多くの蝋燭の灯が幻想的で、三句目、五句目の「冴ゆる」を二種に巧みに使われ、学ばせて戴いた。大人の時間を満喫し、明日への活力に満ちた一日であったに違いない。

◇日々雑念（二月号）

栢尾さく子

飛べた日や走れた記憶残る虫
袴着に鷹の羽ある紋所

七十年以上も会えてなかった旧知の友と、電話で交流する事が出来た。二人は忽ちあの少女の頃に戻る。思い出を共有する二人は時も忘れて話したにちがいない。出来なかった事が出来た日の喜び感動が、遠い記憶として残って居り「残る虫」に深い趣を覚える。袴着は今で言う七五三の儀式で、古くは三歳に、後世では五歳七歳に行われる。男の子の紋付着物に袴の姿は、幼くとも凛凛しい。鷹の羽の紋所には「並び鷹の羽」「違い鷹の羽」など多くあり、格調高い一句。

酒かめか酢がめか迷ふ雪女郎
落日やもみぢ乾いた音で散る
むさし野で遊びぽつぺん吹いた頃

酢も酒も甕に入れて保存されている。雪女郎が現れて、どちらなのか迷うのではないかと「雪女郎」の句としては、とてもユニークで若々しい発想に敬服。二句目最後まで木に残っていたもみぢ葉が、乾いた音で散った。瞬間を捉えた静と動。加えて静寂の中の音も。映像の一コマのようである。

共に武蔵野に育った旧友とは、ぽっぺんを吹いて楽しんだ事もあった。ガラス製でフラスコ状の長い管から息を出し入れすると、底部の薄いガラスがペコペコ音を出す。その音から「ぽぺん」「ぽんぴん」などとも言われる。割れ易く儚いぽっぺんが、少女期と重なる。

硯箱

◆季音二月

井口俊晴

虎落笛犬の遠吠え急きたつる　鈴木康世

激しい風がガタガタ、ヒューヒューと騒々しい音を立て、真冬の闇を吹き抜けて行く。真っ暗がりで怯えた犬が吠え声を上げる。大人の私だって胸騒ぎがするくらいだから、犬小屋にたった独りでいる犬が震え上がるのはよく分かる。最初に鳴いた犬につられて、どこかで別の犬の声が上がる。もう一頭、また一頭。急き立てられるようにあちこちから。まるで遠吠えの合唱だ。

落武者の古道隠せし枯尾花　松宮保人

戦いに敗れて逃げ延びた落武者。落武者は薄の穂にさえも怯えると言われたものだが、落武者主従が命からがら逃げ延びて行った間道を、今は枯尾花が埋め尽くし、何百年も昔にあった流血の痕跡を消し去っている。銀白色に輝く薄の穂が波打ち、大平原の向こうには、早くも雪化粧をした富士山が聳えている。

餅搗や入るる相の手里訛　森川義子

年の暮れは餅つきのシーズン。村の子供たちが見守る中、熱々に蒸した糯米を、真っ白な布巾から臼にあける。後は時間との勝負。ぺったんぺったん、力を込め、臼に杵を振り下ろす。重たい杵に手を潰されないか、見ているとハラハラするが、相の手は慣れたもので、振り上げた杵を一瞥もせず、濡らした手で、調子よく餅をひっくり返している。まあ、なんとお里の訛り丸出しだよ。

油断して葱鉄砲や根深汁　福田千春

凍える夜にはアツアツの根深汁。お椀を抱くように持って、ふうふう口を尖らせて汁を吸う。おっと、しまった。うっかり葱の外側を噛んだら、中の芯がつるっと飛び出して、喉が火傷するかと思うくらいびっくりした。そこで、熱い葱鉄砲

を食らわないように根深汁を堪能するには、葱を真っ直ぐ、直角に切らないで、斜め切りにすればよいのだとか。果たして本当だろうか。

寒気来る臼歯の穴を舐めづれば　渡辺舎人

おー寒い。じっとしていると震えるくらいだ。何だか訳もなく奥歯に舌を動かす。舌で探るのは右上の大臼歯。実は大きな穴が開いている。虫歯の治療をしたのだが、詰物が取れて、以来、ずっとそのままにしている。「八〇二〇運動」と言って、満八十歳になっても二十本以上の歯を残そうという、国や医師会の運動があるというが、そうだとすると、自分はどうなるのか。生涯、自分の歯で食べる楽しみを味わえるだろうか。ありゃりゃ、また寒くなってきた。

バラライカ流るる店の狸汁　石田慶子

「えっ、狸汁を食べたの?」それもロシア民謡でお馴染みの弦楽器・バラライカの曲が流れる店で……。何とも不思議な感じがする。筆者は十数年前に友人数人と狸汁を食べたことがあるが、美味しいとはお世辞にも言えぬ代物で、中には一口で箸を放り出した者もいた。ギトギト脂が浮いた味噌仕立ての汁は獣臭く辟易した。だが、最近は狸に限らず、野生の鹿や熊などの肉を使ったジビエ料理が人気。狸汁を出すロシア料理店が現れたっていいかもしれない。

モスリンの母の面影山紅葉　飛永　鼓

真っ赤に染まった山紅葉を眺めていると、モスリンの着物を着た若い時分の母親を思い出す。モスリン、どこかレトロな感じがする薄地の毛織物で、絹織物と違い、手触りも良く、親しみやすいのが特徴だ。明治・大正から昭和の時代に愛用され、いつの間にか忘れ去られてしまった。決して贅沢でなく、だからと言って貧相なわけでもない、軽くて暖かなモスリンは、そのまま優しいお母さんに通じるのだ。

不器量な柚子と遊びつ仕舞風呂　熊倉千重子

きょうは冬至、しっかり南瓜を食べ、やっと夕飯の後片付けを済ませ、腰をさすりながら仕舞風呂に浸かる。後は寝るだけと、しばしの間、湯船に浮かぶ柚子を突っつき、子供みたいに遊ぶ。表面が凸凹していて、何だかあばた顔みたい。ミカンのように皮が薄くて柔らかくはない。その代わり、鼻を近づけると良い香りがする。器量良しとは言えないが、柚子って可愛い子だ。

季音雪

佐保姫　田寺玲子

佐保姫の望む出土の青銅鏡
王羲之（ぎし）の臨書なかなか雨水の日
城址の錆し鉄鎖や冴返る
糶あとに残れる鱗余寒なほ
月おぼろ下駄音かろき先斗町

盆梅展　十倉和子

俎はタンゴのリズム春立つ日
釣具屋の魚拓はね出す雨水かな
城濠に海の鳥くる雨水かな
水温む影も薄紅フラミンゴ
大玄関にどつと履物盆梅展

満身　永野史代

牡蠣すすり満身に海満ちてくる
二日はや猫カフェの犬大吠えす
夫婦して酔ふ粕汁の夜は更けて
一匁から始まるよ手鞠つく
喧嘩しても二人仲直りしても二人狸汁

春立つ　西山貴美子

挨拶は空ではじまる余寒なほ
秋子遠し件（くだん）の椿落ちもせで
小粒の幸てふ寒蜆買ひなはれ
再会のロビーに握手日脚伸ぶ
立春の柱を磨くぬか袋

春の雪　波多野寿子

ピアノ弾く窓にさんさん春の雪
ハミングで閉づる楽譜や春浅し
誰も来ぬ踏石濡らす春の雨
国宝の城の華やぐぼたん雪
格子戸を音なく叩く春の雪

平凡　星野和葉

平凡も非凡も難し大根煮る
経ひびく広き本堂冴返る
冴返る卒塔婆小さき音を立つ
岩かげの鯉動かざる余寒かな
待ち合はすホームの端や余寒なほ

待春　茂木和子

街路樹の芽吹く気配や鳥さわぐ
門柱に羽根のある虫浅き春
春を待つ庭の老桜ぬうぼうと
下駄の歯は平らに減らず春を待つ
春寒の街に昔の真知子巻

初明り　矢作水尾

大漁旗船旗昂ぶる初明り
風花やみんなよき名の舫ひ船
早春の新造船の槌の音
風が生み風が育つる波の花
門の真一文字に雪解風

老いの春　山中みどり

口ずさむサン・トワ・マミー春の星
海馬消滅それも幸とや白木蓮
良きことも悪しきも忘れ桃の花
つなぐ掌の薄きが哀し初桜
ふたり居るこの温もりや春の月

ふりむく女　柚木治子

匂ひなきモデルルームや春寒し
来し方をふりむく女梅三分
余生めく動かぬ水車蕗の薹
蕗味噌の苦みにほろり盃交はす
梅月夜お蔦に似たるうしろ影

獺祭の頃　由良ゆら女

早春の光一筋水時計
佇みて漏刻の音や春の雪
床の間に蛇籠が一つ諸子舟
褒めごろしするな触るな牡丹の芽
ふつふつと心は老いず柳の芽

如月の網野月を　野仏　石井喜恵

官打ちのたとへのありて実朝忌
渡り漁夫猿公といふ沖言葉
耕人やうしろ歩きの今日明日
たぶん猫犬ではないな春の泥
春の星見上げつ鯉の水合はせ

初明り衛兵の立つ二重橋
野仏の寂光透かし歯朶さやぐ
野水仙野に奔放の揺らぎかな
春雷や埠頭に揺るるクレーンの荷
雁風呂や崩すに惜しき砂の城

半幅帯　石山かつ子

いつまでも手を振る別れ風花す
さりげなく贈る真珠や春浅し
揃ひ半纏先供走り春まつり
先つちよは風を呼ぶかに欅の芽
観梅や半幅帯を貝の口

立春　大橋廸代

春や立つことに大判新書の香
立春の陽を浴ぶるべし書痴の夫
立春の水なみなみと罅の甕
胎の児の心音しかと聴く雨水
こふのとり来る古墳島木の根明く

見知らぬ人　大村節代

肥後守で削る鉛筆余寒かな
土室（つちむろ）の野菜いきいき雪解光
草青む見知らぬ人へ遠会釈
春の山ひとりの幅の道続く
春の宵眼鏡に合うた紅を買ふ

移り香　小倉倭子

初雪の淡き恋路の夢見ごち
風花や走り書きする吟行帳
風花の一片受くる稚児の口
ゆきあうてふつと移り香梅見ごろ
梅見茶屋まあるい背が寄り添うて

寒き夜　栢尾さく子

明確な心音寒き夜の孤独
わた菓子のほのかな甘さ春近し
梅林を行くに逆立つ髪宥め
昭和史の死にざまを読む寒き夜
高窓へオリオン招く冬の宿

名残の雪　菊池ひろこ

開門へ名残の雪の華やげり
実朝忌ひそむものなき波の裏
源流の暗さが夢に春の風邪
梅林へ御高祖頭巾が先立ちて
紅梅も歌碑も煙れり学び舎も

早春賦　五明昇

春兆すトングに軽きクロワッサン
国生みに始まるロマンの建国日
アルプスの雪解に逸る梓川
そぞろ旅梅に遅速のありてこそ
貸し杖の燥ぐ日和や梅見頃

上から目線　境延昭

啼く声の上から目線寒鴉
さ小舟を舫ふ岸べり野水仙
然りげ無き少女の会釈春隣
贈り名に要らぬ院の字野水仙
春寒の里に鉱泉宿二軒

野水仙　椎野美代子

野水仙白波ときに立ち上る
眞帆片帆水平線を野水仙
野水仙群れつ凭れず古戦場
あきらかな潮目の光り野水仙
野水仙抱くほど欲しや潮嵐

春光　島津初花

白梅の一番に咲くわが家かな
両岸を水尾の繋ぐ親子鴨
鳥羽谷のど真ん中を雪解川
春光に魚干す女の漁師町
春光や耕転の土湯気放つ

梅二月　鈴木康世

逢へぬ友行けぬ故郷梅の花
梅林にひびく指笛兄かとも
老梅や幹に句点のごとき瘤
転倒し杖を頼りの梅二月
天ぷらを食べに家族で梅日和

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2023年5月号

特集 正岡子規と旅
○子規が旅にもとめたものとは何か　坪内稔典
○正岡子規の旅先での出会い　復本一郎
○子規の旅俳句30句 抄出・小西昭夫
○子規の旅俳句～一句鑑賞　岩岡中正　しなだしん　高田正子　佐藤成之

〈グラビア〉俳句界NOW　桑田和子

特別作品21句　坪内稔典

特集 漢字・ひらがな・カタカナ ～目で読む俳句
○句セレクション　広渡敬雄　津高里永子　宮本佳世乃
○自句自解～表記にこだわった句　井上康明　遠藤由樹子　矢野景一　中山奈々　宮崎斗士　高勢祥子

発表！ 文學の森賞
※セレクション結社「空」柴田佐知子

私の一冊　松林朝蒼「夏煙」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　神蔵孝之（実業家）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

季音月

雨水　森本早苗

頬撫づる風瑞々し雨水かな
はこべ生ふ廃寺に褪せし塔一基
春立つ日口元緩ぶ鬼瓦
月朧「チエミ」のさのさ口遊む
檄の飛ぶ少年野球春寒し

迎春花　梅澤佐江

実朝忌彼の日のままに段葛
雁風呂やけぶる涙の火吹き竹
金色の一葉閉ぢ込め薄氷
ゆふぐれのこころ馥(かを)らす春の雷
全快の友に贈らむ迎春花

紅ほのか　松井由紀子

鳥声の今朝ははなやぐ春隣
妣のもの纏ひ余寒のなかにをり
あぢけなやひと日限りの春の雪
人為地異おどろおどろと二月尽
あたたかや忌明の友の紅ほのか

帰心　荒井倶子

紀元節仮名の成立ち説く講師
拍手に鳩が飛び立つ梅日和
羽搏ける鶴の帰心や二月尽
引鶴や帰心叶はぬ紙の鶴
春炬燵訛の聞こゆ姉の文

人形振　丸山マスミ

始発駅指呼きびきびと春隣
機音のくぐもるリズム春浅し
波音に和歌口を衝く実朝忌
春めくや床の掛字は「壺中の天」
春の宵人形振の立女形

春隣　内田恵子

樹木医の大き手と耳春隣
独り言呟く大樹冬霞
ダイヤグラムの隙間を捜す春隣
酢牡蠣を啜る怪奇小説読みながら
語り合おう鬼と平和を節分

雛祭　鳥羽和風

雛祭蔵へ飛石七つかな
毛氈と紅白めでた春障子
うりざねの雛を愛でし母の母
女夫雛三本立のシネマ館
雛の宴男の顔に化粧水

和菓子の包み　高島寛治

新粧の和菓子の包み春隣
ビルの窓燃え立つ如く冬茜
道標の傾げてをりぬ冬の山
鴨の陣大将どこにも見当たらず
掬ふ手に白魚はみな水の色

水温む　池田雅夫

遠山の白きに春の届かざる
幽谷の谺重なり山笑ふ
如雨露から五色の光水温む
春雨や裾をはしよつてゆく若衆
入婿のただ黙黙と耕せり

鎌倉逍遥　正木萬蝶

凍豆腐とうふの角の噺など
陰日向なき妻の炊く凍豆腐
雅男の血脈あはれ実朝忌
江ノ電で一日さ迷ふ実朝忌
春めくも大台ケ原の深眠り

雪虫　松宮保人

菩提寺の屋根に春光吸ひ込まる
宿根をくすぐる音のなき雨水
鉢巻の男眺むる畦火かな
雪虫や渓流に沿ひ駆ける子等
機嫌良き赤子の笑みや猫柳

凍豆腐　大場順子

蔵王颪に吊るして哭かせ凍豆腐
月影に深き廂や凍豆腐
水仙花帯きりきりと巻かれけり
冬夕焼赤赤と燃え流離の日
木地乾くこけし工房春隣

梅見茶屋　森川義子

まろやかに住み古る家に歯朶飾る
穏やかに瀬戸の島々初明り
すぐそこに初島見ゆる梅見茶屋
春菊を摘む坪庭の夕明り
風花の舞ふ寺町の昼さがり

初蝶　藤澤喜久

らくがきの巨人咳込む春埃
梅見月遮断機下りて車椅子
春昼や急ブレーキ音程近き
道の辺に並ぶ野仏春埃
初蝶や少し遠出の車椅子

薄氷　山田美佐尾

公園の池の薄氷鞠ひとつ
春寒し寺の廊下の足のうら
釣人の竿が動かず春寒し
おとり捜査の網にかかりし浅き春
昔日の写真あれこれ建国記念日

花菜漬　井上燈女

妻の座を渡す嫁なし花菜漬
赤飯のほど良く炊けて一の午
おおらかな平和を願ふ建国日
四方の連山封じ込まれし春の霧
跳び石を奪ひ咲きたる犬ふぐり

寒鴉　町野広子

紐長く繋がるる山羊草萌ゆる
枯園の広がる窓辺パスタ食ぶ
牡蠣フライ摘むは主婦の特権ぞ
炊き上がる牡蠣飯に牡蠣後乗せす
声佳きが一羽混りて寒鴉

建国日　渡辺舎人

水仙の芽を踏みしことといつまでも
曽爺の立つる一煙山笑ふ
二ン月の関節緩め海月みる
でんでん太鼓の鬼よく泣けり節分会
今日といふ遥けき昔建国日

菜飯　井上玲子

洪鐘のわたる嵯峨野路冴返る
行き暮れて急ぐ嵯峨野路春寒し
薄氷や放生池の鯉きよら
安曇野の光まばゆし春隣
生き生きと命ながらへ菜飯食む

蕗の薹　上戸千津子

無住寺に今年もひそと蕗の薹
山肌の見え始めたる雨水かな
初午や初老の粋な晴れ姿
風出しまだ匂ひ立つ畦火あと
空光り途切れ途切れの春の雪

玉子焼　松本光子

「国定村」越えし隘路(あいろ)の雪解風
雪解川飲みたし不老の滝の水
日差し入れ畳の目数も春浅し
浅春の江戸の名残りの玉子焼
白梅に術後を祈り力とも

春浅し　井口俊晴

本堂の如来座像に余寒なほ
目を覚ます墨絵の世界雪解かな
遠山は日に日に黒く雪解かな
跳ね仔馬牧場は広し空青し
海山がモノクロとなる紀元節

梅　川崎道子

老梅の気骨の一輪励まさる
梅東風や醤のにほふ発祥地
末黒野にひしゃげるバケツとごろた石
けふ雨水干す大樽の箍ゆるむ
少年に髭生ゆ兆し雨水かな

春寒し

井関礼子

半生を峡に住み旧り春寒し
籠り居てしづまる峡や春寒し
春寒し町騒遠く峡に住み
コロナ下の世事いつまでぞ春寒し
春寒し変りなき日々こそ良けれ

梅の花

西浦千枝子

歩の弾むちらほら咲きの梅林へ
豆撒くや鬼とは何か知らぬ児が
小春日や補聴器つけたりはづしたり
吊り橋も通行規制梅の花
囀りが耳元にあり一軒家

春近し

福田千春

立春や睨み残れる鰯の目
神木は甦りたり実朝忌
鳩サブレーどこから食べよ実朝忌
悄気返る子をそつと抱きバレンタインデー
春めけり真打の出を待つのれん

雪景色

松山清子

ラムと韮ほどよく焼けて無口なり
マシュマロの口中で溶け春の雪
片栗の群生を見にはるばると
神木の注連しろじろと冴返る
ワイパーの向かう次第に雪景色

メロンパン

野口和子

ミモザ咲くバッグの底のメロンパン
横綱級大関級と大寒波
日脚伸ぶ珈琲店主丸めがね
桜草小さき木漏れ日光りけり
呉服屋の消えて久しや針供養

☆　☆

季音花

朧

原田秀子

鐘楼の余韻朧の闇に消ゆ
半眼の白衣観音朧影
指先に仄と移り香田芹摘む
ネーミング不満顔して犬ふぐり
覇者眠る丘を彩る犬ふぐり

神宿る山

曲淵徹雄

ひと潜りしても変はらぬ鴨の顔
白白と神宿る山寒造
上面をうつす姿見寒の雨
霊峰に燃ゆる光背寒夕焼
捨畑の隅の華やぎ水仙花

少年剣士

保坂翔太

新しき血潮湧きたる初日の出
赤子泣く力強さよ初詣
法螺貝の澄み渡るなり初茜
羽根つきの空振り幾つ爺と婆
颯爽と少年剣士竜の玉

片栗の花

笹本啓子

片栗の花少女はいつも俯きて
ふるさとの味を頂く蕗の薹
春落葉今だ残りし長屋門
如月の心電図には乱れ無し
薔薇の芽や返る言葉に棘ありぬ

早春の海

野田静香

早春の海を車窓に画学生
早春の光と入る和菓子店
町工場の祠褪せたり一の午
騙し絵の絡繰見えず亀鳴けり
菜を刻むリズム佳き日や紋黄蝶

名のみの春　河野はるみ

春立つや一番鶏の鳴き急ぐ
朝帰り知らん振りして浮かれ猫
手水場の柄杓留め置く薄氷
薄氷や人差指のいたづらに
春寒し時折消ゆる街路灯

正義の風　青木鶴城

生きるとは迷ふことなり遍路杖
来し方や耕す土に祖のにほひ
激動の中の辛夷よ青雲よ
風車正義の風を探しをり
春の星祈りを幾つ数へたり

街に出よ　日高道を

初手水午前零時の町の黙
山頂にもろもろの人初明り
日常が少し危ふし去年今年
春の雪しばらく積もるつもりかな
街に出よ浮かれ猫にも俳諧味

春めく日　檜鼻ことは

留守電にロボットの声春寒し
穴ひとつ緩めしベルト春立ちぬ
春めくや卒寿の母の枕元
カーテンを外すアパート春の雪
春雨や手にも顔にも畑にも

先付　近藤徹平

山盛りの独活の先付峡の宿
色も樹形もさまざまなるや梅の里
文豪の「贈呈」サイン冬星座
正一位寄進灯籠細雪
魑魅魍魎の振仮名またも春寒し

木の芽　大塚茂子

浅春や千草みな色もち初め
天そそる剣のごとき辛夷かな
石段の伊香保湯煙垂れ梅
沢音に覚めし里村つくし摘む
木の芽張る名もなき山の身づくろひ

綿雪　飛永鼓

綿雪の限りなく降る息づかひ
綿雪のふはり舞ひ下り鬼になる
四畳半の景色整ふ梅一輪
寒の水汲みて安堵の齢かな
春光や早る心地のまだ少し

バージンロード　熊倉千重子

乳呑児の紅き唇梅ひらく
料亭の庭隅揺るる枝垂れ梅
春佳き日バージンロードの扉開く
蕗味噌の苦みうれしと床の母
ほつこりと寄り添ひ合うてふきのたう

新しい時への一歩　石田慶子

石段にふと公暁みる実朝忌
荒東風や原つぱのござ攫はるる
「もらつたよ」弾む声聞くバレンタインデー
先生にもらふ無念やバレンタインデー
春の風甘いのが好き卵焼

水仙の崖　石川理恵

水仙のこの崖が無くなるといふ
大切に玉子使はむ春の風邪
春の風邪スープばかりを飲んでゐる
老夫婦で商ふ菓子屋梅白し
梅の香やマスク外すか外さぬか

六地蔵　田中章嘉

山野にも激しさを増す春の鳥
小春日や腕思ひきり天を突く
早春を待ちきれずして種を買ひ
六地蔵に誰が供へし福の豆
水温む我は花壇の土起し

春の月　後藤綾子

凍ゆるむ水琴窟の音かすか
ウィンクの達磨机上に受験の子
ふつくらと日照雨に光る猫柳
暮れ泥む橋の袂の猫柳
しみじみとこし方思ふ春の月

梅　中野　彊

豆撒いて更なる福を祈りたり
手袋の中に戰禍の少年期
朝の窓梅開きたる安堵かな
バレンタイン赤き包みを飾りをく
おでん鍋語り合ふこと多きかな

浅春　下川光子

畦道は軽トラの幅春近し
挨拶に空咳ひとつ春寒し
こはばりの肩甲骨の余寒なほ
ペンギンの相思相愛春隣
ペンギンの行列愉快薄氷

馬頭観音　野平美紗子

たんぽぽを供花とし馬頭観世音
冴返る真青な空をガラス越し
葉隠れに小鳥遊ばす紅椿
金色の蕊豊かなる寒椿
冴返る窓より富士のくつきりと

白梅　宮崎チアキ

春めきて思はせ振りなメールかな
早春の友に振る舞ふレモンティー
白梅の満ちて王妃の風情かな
主去ぬるも馥郁たるや梅の花
雁供養夢に向かひて飛び立てり

木の芽時　葛城千世子

折り矯めて活くる花木や竜天に
自由花のテーマは王女はないちげ
五人席の割り振りまどふ春花展
まるまりて自転車を漕ぐ雨水かな
「はい」と出す合格証書木の芽時

巨石　松島寛久

戦場の男の涙雨水の日
鳥羽谷の雨水ふくらみ幾星霜
牧童の枯園の寺の念誦かな
鋤焼や鶏潰し漁夫の夕
不動と無言の巨石枯の園

亀戸天神　瀬戸雄二郎

梅を見に葛餅食べに亀戸へ
羊羹は虎屋がよろし夜の梅
鎌倉や迷ひ込みたる寺に梅
寺暮れて参る人あり梅の香
幹老いし紅梅になほ艶の有り

句集
森は今
西池みどり

「ひまわり」主宰の第七句集！

森は今青水無月の風と会い

「森は今」というタイトルは、昆虫は今、でもあるし、人類は今、でもあります。過去をどう伝えるか、未来がどうなるのか、「今」の生き方が大きく関わってきます。
（あとがきより）

定価2,970円(10%税込)
四六判／並製／160頁
ISBN978-4-04-884523-6

KADOKAWA　発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008（ナビダイヤル）へ

最近の名句集を探る　座談会
司会◉筑紫磐井　大西朋　望月周
星野高士『渾沌』　小澤實『瓦礫抄』　岸本尚毅『雲は友』　望月とし江　俳句日記2012』

「俳句四季」全国俳句大会予選通過作品発表

◎巻頭三句
長谷川櫂
増成栗人
徳田千鶴子
横川はっこう
足立賢治
池田恵美子

◎今月の華
遠藤風琴
北大路翼

◎俳句と短歌の10作競詠
阪西敦子
辻井竜一

画家・成瀬政博の新連載スタート！

◎好評連載
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2023年5月号　4月20日発売　定価1100円(税込)
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明二月号）

小久保佳世子（街同人）

黙食のランチ山茶花お喋りな　椎野美代子

新型コロナの感染対策として食堂や学校給食で会話禁止の言葉として黙食は広まったようです。

黙食という考え方（黙って感謝して食事を頂く）は仏教界では古くからあるようですが、現代の流行語として掲句の黙食を読みました。強いられた「黙食のランチ」でしょうか？ふと目を山茶花に向けると山茶花のお喋りが聞こえてきます。心は食事を離れ山茶花の声なきお喋りに聴き耳を立てているようです。

この句の場合作者以外の人が居るのか居ないのか分かりませんが、黙食とは人と人の繋がりより感染対策を優先する振舞いに違いありません。賑やかに咲く山茶花のようにランチは軽いお喋りをしつつ楽しむものだったはずです。人と人を隔てるアクリル板、全員マスクの光景が一日も早くなくなり、黙食という言葉も過去のものとなることを願わずにはいられません。

三年に及ぶコロナ禍は、日常の風景を変えてしまいましたが、コロナ禍が俳句にどう詠まれたか興味深いところです。

冬うらら小径にあそぶ五七五　河野はるみ

三歳と一歳の孫がいます。彼らを見ていると目が覚めて寝るまで目いっぱい遊び、正に「遊びをせんとや生まれけむ」（梁塵秘抄）の世界です。芭蕉は「俳諧は三尺の童にさせよ」と言ったとか。無心に遊ぶ童こそ俳句作りのお手本ということでしょうか。童子が遊ぶのを見ていると意味不明なお話など交えて確かに言葉のリズムを楽しんでいるようです。

下五に「五七五」を据えた掲句ですが、この五七五であそんでいるのは童ではなく作者自身だと思います。小径という何でもない場も五七五のリズムに乗せて俳句に仕立ててしまう喜びが冬うららの季語によって伝わってきます。

「定型と季語。俳句にとって大切なこの二つの事柄を、句作のさいには同時に考える必要があります。しかし、それが案外難しい」「良い季語を思いついたのに、五七五の定型に合わない。そんなときにとても重宝な俳句歳時記です」

最近出版された『音数で引く俳句歳時記』（草思社）の監修者岸本尚毅氏は「はじめに」の中でこう述べていますが、俳句は音数と季語を遊ぶ詩形と改めて思います。

現代俳句鑑賞

網野月を

星溢れ凍蝶の死を照らしたり　坊城俊樹

（『俳句』2月号・或る女より）

「凍蝶の死」は星明りくらいが調度良いのである。ストイックなまでの寂寥感が滲み出ている。「凍蝶の死」は極小なものであり、星明りに照らされていたとしても、目を凝らしてもなお判然としない程の極薄な存在であろう。一句仕立てにして切れを作らずに言ってのけたところにテーマ「死」の神髄を感じる。他に「或る女逝きて仰臥や冬の星」「猥褻な紙屑照らす寒の月」がある。

たんぽぽの話に入れない長さ　赤羽根めぐみ

（『俳句』2月号・グローブジャングルより）

座五の「…長さ」は何だろう。一連十二句の中での最も難解に思われた句である。筆者は「たんぽぽの話」が長いのであろうと解釈した。題の「グローブジャングル」の設置してある公園での誰かの話、もしくは誰かと誰かの会話であろう。「入れない」ことの何とも言えない感覚が蘇ってくるようである。他に「嘴はずぶと己刺す浮寝鳥」「グローブジャングル罪状春の空」がある。

葉牡丹の新種令和も板につき　桑田真琴

（『俳句』2月号・水面鏡より）

「令和も板につき」は、令和も五年となって将にその通りである。その通りを言いながら「葉牡丹の新種」を取り合わせている。花卉のあまりない時期に「葉牡丹」は、貴重な存在である。自家だけでなくパブリックスペースにもよく植栽されているのを見かける。「新種」を見つけると、思わずこんなのも出来たんだ、と嬉しくなってしまうのである。「板につ」いた安心感、「新種」の幸福感が充填されて待春の季感である。

北窓を開き入る魂去ぬる魂　山本鬼之介

（『俳句四季』2月号・北窓開くより）

人にとって冬という季節を問い直している。一般的に「北窓開く」は長く厳しい冬の終焉と春のおとずれの期待感を季語の本意・本情としている。が本句は、「去ぬる魂」として従来のこの季語の本意・本情の在り方に問題を提起している。マイノリティーと考えられてきたものへの再考を促す一句である。

里山にひろごる匂ひ水の春　間中恵美子

（『俳句四季』2月号・怒濤のこゑより）

座五の季語「水の春」から「ひろごる匂ひ」は水の匂いであろうと想像する。土の匂いを春のことぶれとして捉えることは常套であるが、本句は水の匂いである。加えて「里山」のような比較的広い空間を句中に設定している。作者は、水の匂いを感じ取っているのだが、「里山にひろごる」ことから人間的知覚の範囲を超えて景を大きく捉えている。もしくは心象とも解せるかも知れない。他に「すずかけを背に春の河のたり」がある。

冬ざくらこころの襞に埋めしもの　寺内由実

（『俳句四季』2月号・うさぎのオブジェより）

「埋めしもの」は上五の季語「冬ざくら」によって、その存在感を顕わにしたのである。折角埋めて仕舞い込んだものがまたしても顕在化してくる様子を、「冬ざくら」の本来の季節ではなく咲き出したことに擬えている。しかしながら「冬ざくら」であるので顕在化と言っても大きな様を有している訳ではないのである。他に「雑貨屋にうさぎのオブジェ雪催」がある。

砂つもる音のして都市暮れはじむ　久保純夫

（『俳句界』2月号・和泉風土記より）

一連の十句は筆者にとっては文字通り難解な句ばかりである。本句も勿論、難解であり付け入る隙のない句である。句意は句中に叙述されているままであろう。作者は「砂つもる音」を聞き分けて「都市」の「暮れはじ」めることを感じ取っている。作者は「都市」の存在に何らかのネガティヴな感覚を抱いているだろうことは「砂つもる音」から想像されるのだが、それ以上は分からない。ただ、詩的世界の構築を意図していることははっきりと解かる。他に「神農の虎へこへこしへこへこす」がある。

鎌倉は波の音より明易し　星野椿

（『俳句界』2月号・自選30句より）

中七の「……より」は起点としての意味合いとして解釈した。由比ヶ浜に展いている鎌倉の街並みは、「波の音」から明けて来るのだ、という解釈である。格助詞として「より」はもとより起点・経由であるが、副詞の「より」は比較も表すことがあるので、解釈も使用も要注意なのである。鎌倉に長年住み慣れた作者は、「波の音」に昼夜の理を聞き分けられるのであろう。優れた感覚が生み出した優れた句なのである。

日向ぼこといふ衣はぶかぶかで　吉川拓真

（『俳句界』2月号・焚火より）

余程に好い「日向ぼこ」なのであろう。座五の「ぶかぶかで」は着心地の良さを表現していると筆者は解釈した。この「ぶかぶか」感を作者は楽しんでいる、と読んだからである。「衣」は「ころも」として中七であるが、「い」と字足らずに読んでもリズム的には心地よい。他に「裸木の肌の輝く旧校舎」「焚火から生まるる焚火の思ひ出」がある。

山本鬼之介　選

水明集

燧石の火の広がりに淑気かな
雪国や土足の猫に雪靴を
雪下駄に赤き爪革白き足袋
青空へ馥郁と香を和蝋梅
明け方のナースコールや福寿草

さいたま　梅澤輝翠

忌へ向かふフェリーの舳先星凍つる
未知数のＱＲコード冬銀河
笹鳴や耳そばだつる藪の中
冬深しいよよ火の入る登り窯
断捨離の抽出し一つ春を待つ

熊谷　越田栄子

初まうで神の島ゆく臨時便
海山の暮色に映ゆる枯すすき
築山に伍する身の丈枯尾花
眼の底に獣もひそむや寒鴉
仕舞屋にひびく柏手初燈

伊奈　菅原卓郎

里帰り二股竿で落とす柚子
初暦くれば朗人の壮大句
伝法な叔母の声音や初芝居
田に一羽ナルシストめく寒鴉
初売や法外な値の金うさぎ

さいたま　清水桂子

丸文字のピンクの手帳春近し
スケートやゼロ泊二日夜行バス
初空や百年越しの眠り姫
皸や母の糠漬け茄子の蒼
大木に黒花咲かす寒鴉

新　暦文

丁寧に生くる決意や去年今年
虎落笛枕の下の瀬音かな
寒鴉群れて景色を揺らしをり
振込みとなりて久しきお年玉
新しき年とて何が変らうか

伊予　向井章子

晩学の深夜放送去年今年
酔眼の袂にのぞくお年玉
初風や蹴だしのそよぐふくらはぎ
凡百の思ひめぐらす日向ぼこ
そこにのみ優しき陽ざし福寿草

さいたま　元田亮一

煤けたる大黒天と年迎ふ
門松の立ちて「第九」の流れをり
我が影に三顧の礼や寒鴉
友禅を洗ふ水音仏の座
母書きし育児日記や煤払

池田珪子

参道の松を制する寒鴉
雪折の松に思案の老庭師
寺庭の落葉清むる作務衣僧
高僧の法衣あらたか初詣
大寒の夜空につどふ星家族

山岸久美子

亡き母と同じあかぎれ親指に
あかぎれや尼僧の踵まのあたり
今日もまた門標に来し寒鴉
壮快に滑るスケート子に拍手
丸帯をぽんと叩いて寒見舞

篠﨑紀子

老松の鱗幾重に淑気かな
仮名綴る穂先滑らか筆始
幼子の畏まるなりお年玉
「おい」と呼び薪を足させる初湯かな
伊勢海老や腰曲げ易く反り難し

さいたま　小林京子

ラガーマンぶ厚き肩の連帯感
掃き清められたる古寺の淑気かな
冬木立その生き様の美しきかな
新風にわが身委ぬる蝋梅よ
かき回す指の節くれ葛湯かな

菅原真理

粥草の価格高騰面食らふ
ありがたしご縁尊ぶ初句会
慎ましくケーキで祝ふ成人祭
初芝居ひときは麗しき役者
駅伝の選手走り行く淑気

平塚　丸屋詠子

屏風絵の龍昇り立つ大旦
玉砂利の鳴る音すがし初詣
餅焼いて武勇伝をも膨らます
烈風に島の麦の芽逞しく
少女らの男言葉や冬薔薇

上尾　横山君夫

崩れ落ちたる本丸跡に返り花
雪催ひ雁字搦めで眠れぬ夜
来客に隠す戦熾火おく
戦の手を母に預けて眠るまで
くるみ割る術を忘れし寒鴉

一壜に美酔を託し寒造
歳旦や大和島根に正気満つ
妙齢に席を譲られ初電車
日本紀の大津の悲劇読始め
霜枯や今こそ出でよ風雲児

歳重ね凜と生きたし初手水
初明り牧場を駆くる放れ駒
弘法の若水を先づ神棚へ
寒の雨風加はらば地獄変
山歩き疲れを癒やす冬苺

天辺にあまたの影ぞ寒鴉
陽の翳り影絵めく枝寒鴉
戦の手で客を呼ぶ花屋の娘
寒卵夫の粥におとしけり
つかの間の命なりけり霜柱

さいたま　渋谷きいち

寒造杜氏の唄声聞こえけり
寒造日本の智恵の成せる業
水仙や途絶えて久し庭の隅
路地に咲く水仙ひとつ萎れをり
終りなき老いを楽しむ初日の出

染谷風子

幼子の晴着の裾に寒の雨
寒造南部杜氏の顔の艶
水仙の香り取り巻く道祖神
水仙の茎折るるまま香りあり
下り立てば風花舞へり山の宿

反町　修

初夢を売るや越後の枕売り
初参講釈尽きぬ七味売り
葛湯飲む夫の横顔七十二
曇天を横切る寒鴉声低し
法面の石積み工事冬の川

霜多光代

蝋梅の香にいざよへば朝の月
神鏡のごとき大沼淑気満つ
ラガー四人引きずり進むトライかな
猛進にタックルラガー迎へ撃つ
落日の光あびたる冬木立

さいたま　千坂平通

村杉清吉

越谷　阿部幸代

さいたま　西幅公子

今朝の米寒九の水に浸し炊く
心身を奮ひ立たせる四日かな
くづれゐる凍蝶の翅風に乗り
楚楚として心洗はる水仙花
水仙や磨きかかりし床柱

さいたま　岡田宣子

咳ひとつ臍出し親父騒ぎをる
白湯飲みてジャムパン一個年新た
正月や死にたくもなし生きたくも
尻を振り人をからかふ冬鴉
十二月サウナの中の温度計

新井孝磨

冬凪や星空纏ひ海眠る
六連星地球は不眠症のやう
暖簾なき和菓子の老舗寒落暉
来し方を語り尽くすや御田酒
トンネルを抜け真ん丸の初旭

皆川更穂

兎追ふ童話のアリス絵双六
焚火の輪から抜けてくる達磨売
見沼野の枯曼荼羅に消ゆる雉子
初鏡眉根ひそむる阿修羅かな
紙コップ紙皿で足る女正月

本橋稀香

若水を汲まん湧水ぽこぽこと
初氷朝日の透かす池の底
片側のマスク外して句会の茶
参道に碧眼のぞく竜の玉
探梅や一万歩来てなほ奥へ

さいたま　加藤でん治

巫女装束の歩む後ろや淑気満つ
大鳥居踏み入る一歩淑気満つ
淑気充つ命名記す墨の香
足湯と地酒ちらつく雪と汽車を待つ
青空へ切り絵のごとく冬木立

竹澤和子

韋駄天のごと競ふ箱根路冬晴るる
生かされて卒寿に感謝冬びより
菩提寺の仏と語る冬の暮
長患ひの義妹の寝顔冬ぬくし
水仙に微笑みおくり別れゆく

杉戸　佐々木史女

日向ぼこ小鳥と語り笠智衆
初場所やテレビに婀娜な日本髪
蝋梅咲くジーナ・ロロブリジーダ逝く
無事暮れて何もない日の冬銀河
初場所初日乳房挟みて押し出さる

さいたま　森下山菜

大寒の主なき椅子の重さかな
雪折の音に紛るる物の怪よ
大寒の犬の遠吠え甲高く
一村の静けさ破る雪折
自信作入賞逃しお燗酒

川口　新井のり子

初御空柄杓の水を覗きけり
元日の夕日海月を放ちけり
凍蝶や小さき蕾を疑ひぬ
冬日和群れ這ふ鳥を池が引く
寒の末木立を撫づる夕日差

さいたま　秋谷風舎

最高の初日撮らむと駿河湾
境内の老松古杉の淑気かな
初釜の足袋の白さや裾捌き
高野山緋色法衣の初読経
透き通る五分の蝋梅郷香る

野村美子

蝋梅や行き交ふ人に微笑みを
傾斜地に耐へ節分草を観賞す
削りたてなる鰹節かをる雑煮かな
床の間の翁の像に淑気かな
やつかいな銀杏並木や冬木立

小川洋子

枇杷の花忘れ上手な介護「三」
単線の枇杷咲く駅の待合室
三輪車の轍どこまで今年雪
都会派のネオンに浮かぶかいつぶり
海鳴りの能登の荒磯や雪催

さいたま　森美枝子

カップルの黙して去りぬ枯野道
地の下に命続くや大枯野
枯野道見上ぐる空の青さかな
長旅の疲れを癒やす浮寝鳥
落日に影の揺れをり浮寝鳥

後記朝香

塗盆の月を枕に雪うさぎ
野兎の伏せに夜明けの静寂なる
曳かれゆく迷ひくぢらの長き水脈
前髪を軽く遊ばせ春を待つ
飄飄とカーブを曲がる春着の子

大阪　遠藤人美

神杉のてつぺんを執る寒鴉
久伊豆の孔雀の鳴くや初茜
二羽三羽いつものすずめ初景色
法螺貝の木霊聞こゆる初比叡
寒鴉塵のネットを引き剥がす

岩槻　飯田忠男

いの一番に火防札受け初詣
喰積やつはもの揃ふ三世帯
疾風の襷つなぐ手息白し
麦の芽や赤子泣く家新しき
大原の阿弥陀三尊淑気かな

風に舞ふ枯葉を追うて知らぬ道
初詣村の神社も大賑はひ
八百段登りて覗く谷の春
すこやかに育て麦の芽ウクライナ
高台に鯨の碑あり男鹿の春

弓手へ馬手へ竹刀ばちばし寒の内
極寒や撞けば割れそな寺の鐘
空缶のからころ競ふ寒四郎
両の手にそつと凍蝶囲みたり
凍蝶や幽かにゆるる室外機

観覧車の瞬き遥か枯木立
橋梁ゆくこたつ列車の昭和かな
饒舌な客寡黙な客の炬燵かな
行儀よく一口はこぶ雑煮箸
身の丈に合ふ暮し良し初神籤

春日部　諏訪サヨ子

仲田利子

さいたま　綿貫ひさの

川崎　鈴木玲子

ラグビーやトライの前の肉弾戦
蝋梅の向かう侘しき武甲山
葛湯溶く風が雨戸を揺らす夜
新婚の床暖房の家を訪ふ
淑気満ちたる朱塗りの橋を人の波

鏡餅横に十七水明抄
影絵から列車飛び出す冬夕焼
京菓子を包む薄紙春の雪
春の雪掬ひて小さき白兎
ダンサーの十指動きて花辛夷

凍蝶や枯葉となりて身を潜め
凍蝶の運を選びて生き延ぶる
寒の内天然氷切り出しぬ
寒四郎富士の裾野の白くなり
初旅や朱鷺に逢ひに船に乗る

玉砂利の音さへ清し初詣
この日だけは神と向き合ふ初詣
麦の芽や戦の終はり願ひたし
北風の孤独な悲鳴夜を駆くる
冬空に三輪素麺の天日干し

さいたま　森下美智枝

綿引まりこ

小駒さち子

草加　外村紀子

寒の内轍の堅く尖りをり
軟膏を擦り込む夜や寒の内
脚ひとつ拖げ凍蝶の留まりをり
飛んでみよ凍蝶に息吐きかくる
美しきまま凍蝶ふいと落ちにけり

さいたま　横山礼子

薬師如来や心の穴へ雪は舞ふ
仕事終へ浸る初湯やしまひ風呂
穴に落ちたる初夢君に手を伸ばす
二人きり華燭の典に伊勢の海老
太平洋独り占めする野水仙

吉川　杉浦理恵

元日に聞く三月は海外と
二日にはてんやの店へ買出しに
暗闇の映画が楽し三日かな
いつよりも休暇の四日きらきらと
丁寧に仕事を始む五日かな

さいたま　吉川拓真

凍蝶や縋る術なく横たはる
返信の筆力増すや寒の内
凍蝶に杖を添へたし畑の中
糺の森静寂を領し寒の内
寒九の水五臓に沁むる老いの日々

糸井しるく

置き余る霜につつまれ路地の裏
実の一つ残りし枝や寒鴉
仏の座何の仏か粥のなか
朝やけに浮き出る飛翔寒鴉
寒鴉止まりて「かぁー」となにを待つ

さいたま　鈴木香音子

水道の栓捻る朝年新た
娘らはスマホで参加年賀の儀
仁王立ちする師の檄や寒稽古
冬耕の一服する間背筋伸ぶ
おまじなひ霜焼の子に母の声

鈴木藻好

風花や眩しく見上ぐる茶臼岳
石段を下れば秘湯風花す
風花や峡の湯宿に四姉妹
女正月意見一致のイタリアン
盛り上がる馴初め話女正月

森　和子

ドアノブにこはごは触れし寒の入
寒の内任意後見制学ぶ
勢ひをつけて起きるや寒の内
凍蝶や突然友は故郷へ
色のなき街に凍蝶ひらりと来

樋口元美

我が道は丈の止まりし仏の座
仏の座何を急ぐと犬笑ふ
太り気味昔は何処寒鴉
炊き出しの列に並べぬ寒鴉
立ち話最後に残るは冬菫

草加　持永喜夫

初えびす絵馬の兎は跳ねたがる
よく喋るインコうとうと初鏡
我が脚の車手放し初不動
日脚伸ぶ一斉リフォーム始りぬ
重石つけ迷ひ鯨は海底へ

和歌山　髙橋満耶子

雪晴やアルゼンチンに帰る友
綾取りや魔法をかける従姉の手
探梅のお供小さな握り飯
晴天の黄色の列車探梅へ
探梅やココアの甘さ染み渡る

さいたま　鈴木敦子

泣き虫のトパーズ色の目の子猫
麗かや森は鳥籠「ラ」で歌ふ
片恋の貴方はいつも桜貝
我儘な妻と犬連れ花疲れ
過疎の村子供が増えて燕の巣

所沢　関根千恵

初富士や振り返りなほ振り返り
松明けの絆深むる法事かな
本年で賀状じまひをする事情
里下り母の横顔見て眠る
三時間待てぬと帰る初詣

さいたま　山戸美子

会ひたさに高鳴る胸や冬草履
去年今年過ぎゆくものの多きかな
新年会らうにやくなんによの笑顔かな
ほらふきの年頭あいさつ苦笑ひ
気合入れ握る竹刀や初稽古

川島夕峰

元日や何をするにも初をつけ
初場所のぶつかり合ひに息をつめ
行列の仲見世通り春着の娘
七草や孫の刻む音リズミカル
年賀状達筆な母の字見つけたり

東京　畑宮栄子

久久の再会の幸降誕祭
ラグビーの教科手縫ひのヘッドギア
ラグビーの練習終はり茜雲
香り立つ葛湯一碗身に沁みる
大旦身近なる幸想ふべし

宮代　関谷多美子

寄鍋の湯気を挟みて泣き笑ひ
時経るや大門脇のさくら鍋
湯豆腐の揺らぎ見つむる風の夜
鶏すきに心溶け出す博多の夜
ふぐちりの福を集めしお雑炊

東　京　山中いちい

富士山の見ゆる屋上初日待つ
居ながらに見ゆる富士山雑煮食ぶ
独り居や首長くして初句会
気に入りの服にブローチ初句会
友の句に嫉妬の心初句会

さいたま　高原和子

御朱印を待つ足元の竜の玉
門柱の色に添ひたる竜の玉
蔵元の御在所跡に竜の玉
冬北斗四百年の光満つ
冬の星迎へのママは小走りに

東　京　飯室夏江

枝先に葉つぱ一枚冬木立
鍋焼の湯気に靄るや夫の顔
クリスマスもぢもぢねだる内気な子
年酒に夢見心地の家路なり
墨滲む卯一字だけの年賀状

さいたま　武田重子

早起きの四人家族や初明り
猿回し太鼓休まぬ二の鳥居
大寒や甍に溶ける月の青
新年の北辰覗く杜のうへ
大陸へ向かへ麒麟よ冬銀河

さいたま　石関六弦

太箸の豆を零して嫁赤面
太箸に悪戦苦闘青き目は
太箸を使ひ馴染みて一週間
楪の出番薄れし当世や
里山の楪摘みて飾りつけ

北出久美子

やめ時と思ひつ一句除夜の鐘
入浴中じつくり聞きし除夜の鐘
子や孫に囲まれお屠蘇頬染まる
元旦や履く靴下に滑り止め
若夫婦そつとさし出す節料理

藤　沢　小島喜代子

終点に乗客一人寒昴
行く年や大河行き交ふ渡し船
軽症の一病息災屠蘇袋
「内緒よ」の広がる噂すきま風
探梅やツアーの出発点呼から

さいたま　湯浅　和

息子伸(の)す餅の厚みのまちまちに
猫去りぬ鉢の氷をぺろりなめ
若水や源氏車の家紋にて
昼も食べまだ残りある小豆粥
早梅に小げらも来たる山ぐらし

鬼石　榊原聰子

束の間の日射しに酔へる仏の座
凍星に晒すタトゥーや露天風呂
肉球の震はせ掬ふ寒の水
ギャルの群ればあば突つ切る師走かな
羽ばたいて空と荒野と花水仙

大阪　飯塚智恵子

寒鴉七回鳴きて動かざる
寒鴉仲間来るまで鳴きをるや
迷ひ来し岸辺謐らか仏の座
踊り子と縁無くも無し仏の座
早梅や置き配といふ新手攻め

さいたま　岡田芳春

我の手の戦愛し母ゆづり
カート出す寒鴉と人の知恵くらべ
電線に寒鴉二羽をり居丈高
眠気さめ漲る応援冬ぬくし
冬鴉ねぐらを追はれ駅集合

鳴海順子

あら玉の子らの振る舞ふ料理かな
初雀餌くるる人良く覚ゆ
どぶろくを飲みたき夫や日足伸ぶ
烏骨鶏の卵届きし今朝の春
成人式メール喜び溢れをり

和歌山　南條きわゑ

初日の出忍野八海富士映す
富くじは空振りなりし初句会
初句会の選常より神妙に
エレベーター待つ間もどかし初句会
久々の和服の出番初句会

さいたま　山下ユリ子

曽孫の笑顔真中に年賀状
憎くけれど悠悠とゆく初がらす
スマホ持つ長蛇の列の初詣
寒梅や空の青さを透き通し
何事もなく年迎へ今朝の顔

東京　柳父はる

寒晴や艱難辛苦包み込み
人の非は言はず語らず寒の月
濃く熱く朝のコーヒー福寿草
こんな日は猫を友とし日向ぼこ
老いたれど淡き想ひや初鏡

和歌山　嶋田洋子

風花や空澄み切つて赤城山　さいたま　落合和枝
風花やせりおとされし魚市場
小正月嬉し浮かれて神の街
女正月海鮮丼を腹八分
小正月返事の挨拶ファックスに
「待たせたね」と渡さるコーヒー寒に入る　小山あつ子
寒波来る苦しまぎれの嘘ひとつ
厳寒の山は静止画めいて暮る
寒晴や思ひつきりの深呼吸
寒風や心の叫び聞こゆるか
孫ふたりひ孫ひとりのお年玉　鬼石　加藤ナヲ子
紅梅の小枝ゆらして小鳥去る
太陽とにらめつこしてふきのたう
風花に上州の山白くみえ
早朝に小さき声出す寒雀　さいたま　川村　治
独り居の小さくなりし鏡餅
料亭の表看板冬桜
一時の心安らぐ冬桜
冬山を揺するトップの赤襷　奥山粉雪
片目だるま来年こそはどんど焼き
黄落や小気味よきほど降りにけり
精一杯生きたとばかり蓮の骨
羽子板市心浮きたつ夜灯り
朝寒や玻璃に一本水の筋

竜の玉見つけて運気上がるかな　さいたま　緒方みき子
目薬を点して夜更し冬の星
塾帰り数式唱へ冬の星
父逝きて一つ増えたり冬の星　古池恵里子
滔々と海へ年越す千曲川
捨てられし大根の首花付ける
冬の月ただ輪郭に拘らず
小春日や歩数の延びぬ立ち話　寺町知子
元旦やしんと畳の白き足袋
初春やワルツの夕べに肩揺るる
人垣に春の風切り襷継ぐ
朝焼けや浮かぶ雲影寒鴉　染矢峯雄
凍る池するする滑る飛礫かな
寒鯉は池の窪みに集ひくる
雪の降る白一面の静けさよ
蠟梅の花ある空の青さかな　草加　吉田十三子
迷ひたる旅人に香を梅一輪
探梅や香に遊ぶ風頬に寄す
探梅や名も無き山に今日の当
五十年交誼の上司春訃報　藤沢　藤田寛二
春やマイク我が人生に悔いはなし
春のホーム歌謡の時間閉ぢしまま

俳壇

5月号

4月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
鈴木しげを

八木 健 選　滑稽俳壇

特集　結社競詠・空想季語に挑戦

特別鼎談　「俳壇無風論」をめぐって
天野小石・甲斐遊糸・加藤耕子
清水　伶・中村　遥・古田紀一
宮坂静生・山田真砂年

巻頭作品10句

四季巡詠33句［第Ⅲ期］…亀井雉子男・笹瀬節子

連載
色の歳時記……西村和子
俳人の住む町…石井いさお・古賀しぐれ
俳句文法　そこが問題、そこがポイント…井上泰至
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……秋尾　敏
十二か月添削教室……前北かおる

俳句と随想12か月　井上論天・清水和代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

俳句

5月号予告

4月25日発売
予価1040円（本体950円）⑩

特別作品　正木ゆう子・山尾玉藻・岸本尚毅

大特集

俳句とユーモア

▼総論　俳句のユーモアとは……辻　桃子
▼解説　俳句におけるユーモアの質の変遷
明治・大正・昭和の滑稽、そして現代
俳句の俗／老いとユーモア
▼座談会　俳句と落語　三村純也・石嶌　岳
特別ゲスト：入船亭扇辰
司会：西村麒麟

追悼　友岡子郷　特別寄稿／人と作品
最新句集評／代表50句

句集特集　日本の俳人100　布施伊夜子『あやかり福』

付録　季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

作品評

山本鬼之介

雪下駄に赤き爪革白き足袋　梅澤輝翠

和服で外出する女性にとって、本降りの雨や雪は厄介なものであろう。昔のような未舗装の道は滅多に無いが、だからと言って天気の時と同様に草履という訳にはゆかないから、やはり下駄を履くことになるのだろう。となれば、爪先の濡れと汚れを防ぐための用具＝爪革が必要になる。

掲句の爪革は雪下駄に装着されたもので、やはり一般的な爪革とは趣が違うように感じる。そもそも季語である雪下駄は、雪国で冬期に用いる下駄のことで、歯を高くして滑り止めの金具を打った下駄であるから、その下駄に取り付けられた爪革も確たる役割を担っている。

雪国新潟県の某市、置屋から雪道を歩いてきた若い芸妓が、いま料亭の上がり框で肩の雪を払いながら雪下駄を脱いでいる姿を思い浮かべると、むかし習い覚えた「十日町小唄」の艶なる歌詞がよみがえり、ついつい口遊んでいる筆者なのであった。「赤き爪革」が決め手である。

冬深しいよよ火の入る登り窯　越田栄子

丹精込めて作り貯めた作品を慎重に窯に収め、準備万端整っていよいよ窯に点火する時を迎えた。焼き上がった作品を取り出す時の緊張感とは違った感情が生まれるものなのか、ずぶの素人には到底解らぬことではあるが、愛し子を世に送り出す時の気持にも通じるところがあるような気がする。

築山に伍する身の丈枯尾花　菅原卓郎

築山の上から眺める庭園の景色はなかなかのものである。今ここに、そこそこの高さの築山と、遠に盛りが過ぎて枯れた尾花を風にそよがせている芒があり、洒脱な冬景色を構成している。先ず築山の高さを読者に想定させ、その高さに匹敵する枯芒を並べたことによって、味のある庭園風景が表されている。「伍する」という言葉の斡旋がお手柄である。

田に一羽ナルシストめく寒鴉　清水桂子

筆者のパソコン机の抽斗に、「日本のうた一一〇〇曲集」と題する古びた本が入っているが、必要に応じて役立ってくれる。「俺は村中で一番　モボだといわれた男　己惚れのぼ

せて得意顔　東京は銀座へと来た」の暗記している歌詞を頼りにひもとき、これが昭和四年に発表された「洒落男」という題名の古い歌であることを確認した。忙しい最中にそんな手間暇をかけたのは、この句の鴉に懐メロの洒落男が投影されていたからである。雨後の冬田の水に映った己の姿に見惚れているかのような鴉を見て、それを「ナルシストめく」と詠んだ作者の感性を佳しとする。この鴉は、その後に東京の銀座へ出掛けたかもしれない。

大木に黒花咲かす寒鴉　　新　暦文

筆者としては、一本の大木に二羽や三羽ではなく、沢山の鴉が止まっている光景を想像する。となれば恐怖感と同時に嫌悪感を覚える。何でその様な異常な状況が発生したのかが判ればよいが、そうでなければ不安な気持が継続する。何と言っても「黒花咲かす」が圧巻である。

虎落笛枕の下の瀬音かな　　向井章子

戸外を吹き渡る寒風が鋭い音＝虎落笛を発している。さて、それでは枕の下の瀬音とは何であろうか。何処かに旅をして、宿の畔を流れる川瀬の音を聴いているとも取れなくはないが、虎落笛が聞こえている状況下ではまことに不自然である。淋しさを増幅させる虎落笛を消去しようとする作者の自衛本能が、それとは真逆の快い瀬音を脳裏に呼び込んでいると解釈するのが妥当であろう。虎落笛によって塞がれていた心の中が次第に解きほぐされて、幻の瀬音を聴きながらやがて深い眠りに誘われてゆくのである。

そこにのみ優しき陽ざし福寿草　　元田亮一

福寿草は、花の少ない時期に咲くので正月花として珍重される。身近な花であるから、特別感じることも無いのかと思うが、作者にとって、何かの弾みにこの花に強く惹かれるものがあり、福寿草とそれを照射している光に得難い優しさを感じたのである。何故そのような気持になったのかは、当人も判らないのではなかろうか。

煤けたる大黒天と年迎ふ　　池田珪子

昔の農家の台所に祀られていた木彫りの大黒天を思わせる俳句である。永年にわたり竈や囲炉裏の煙で燻され、真っ黒に煤けた大国様である。七福神の一人で、左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持ち、米俵を踏まえている。

作者自身か亡くなったご夫君の実家に祀られていた大国様ではないかと想像するが、いつもこの大国様と一緒に居ると心が癒されたのであろう。そして、大国様と語り合いながら新年を迎えたのだが、この大国様を訪ねて残りの六福神がや

ってきて、作者ともども屠蘇を酌み交わしたのかもしれない。

雪折の松に思案の老庭師　山岸久美子

邸宅や名苑などにある松には、降雪期の前に雪吊りを施して、雪の重みで大切な枝が折れないようにするが、その対策が為されていない松が、思いがけぬ大雪に見舞われて枝が折れてしまうと、調和が取れていた松の姿が台無しになってしまう。掲句の松もこのような状態になったものと思われるが、どうしたものかと考え込んでいるベテラン庭師の姿であり、「思案投げ首」という言葉がぴったりの状況である。

丸帯をぽんと叩いて寒見舞　篠﨑紀子

女性が思い通りに着付けを終えた時や出掛けに帯をぽんと叩くことがあるが、力士が立合中に回しをぽんぽん叩いて気合を入れるのと同様の心理状態なのだろうか。寒中の澄みきった大気の中で、さぞかしよい音が鳴り響いたことであろう。

伊勢海老や腰曲げ易く反り難し　小林京子

正月の御節料理には欠かせない伊勢海老であるが、見掛けに反して食べるところが少ない。伊勢海老が望んでの形ではなく、料理の美的感覚としての腰曲りなのかと思うが、これを句材にしてしまう作者の心意気に感じ入った。句材は無限なのである。

冬木立その生き様の美しきかな　菅原真理

常緑樹は葉を付けたまま冬を迎え、一方では落葉樹が葉を落としつつ冬を迎える。どちらも複数の木が冬木立となって冬の景色の中に溶けこんでいる。厳しい寒気の中で、次なる季節に向けてそれぞれが準備しているのである。

初芝居ひときは麗しき役者　丸屋詠子

正月公演の歌舞伎を観ての実感であろう。この役者は、若手の立役か女形のどちらかであろうと思うが、作者が女性であることを前提にすれば、前者即ち溌剌とした若手の立役と見るのが妥当と思う。化粧した顔、衣裳、よく透る声、所作の切れ味など、全てにおいて満足する役者であった。

餅焼いて武勇伝をも膨らます　横山君夫

雑煮の餅を焼いている夫であろうか。妻や家族の前で、現役サラリーマン時代の手柄話を滔滔と捲し立てている。誰も真面目に聴いていないので、話が次第に誇張されてゆく。餅が大きく膨らんでは破れる。

雪催ひ雁字搦めで眠れぬ夜　渋谷きいち

朝から空がどんより曇りしんしんと冷えて今にも雪になりそうな陰鬱な天候の一日であった。ある悩み事を抱えて床についたがなかなか眠れない。やっと眠りについたと思ったら嫌な夢を見て目が覚めてしまった。

妙齢に席を譲られ初電車　　染谷風子

初詣に出掛けた電車で、うら若い女性に席を譲られたのである。新年早々の嬉しい出来事に、歌舞伎の名演目の一つである「三人吉三郭初買」の中の「大川端庚申塚の場」におけるお嬢吉三の名科白「こいつぁ春から縁起がいいわぇ」を真似て大見得を切りたくなったのではないかと推察する。

初明り牧場を駆くる放れ駒　　反町　修

牧場で放し飼いにされている馬である。東の空がほんのり明るくなった元旦に元気いっぱい駆け回っている馬の蹄の音の躍動感が伝わってくる俳句で、詠んでいて思わず力が入る。

陽の翳り影絵めく枝寒鴉　　霜多光代

射し込んでいた日光が雲によって遮られ、木の枝とそこに止まっている寒鴉が影絵のように見えたのである。もともと明るい印象を持たない鴉であるが、光が遮られたとするとその陰鬱さは尚更のことであろう。たまたま作者の目に止まった光景かもしれないが、「影絵めく」と詠んだのが良い。

終りなき老いを楽しむ初日の出　　千坂平通

老いは月日と共に確実に進行するもので、元旦の初日の出を拝む気持も、新たな年を迎える度に老いてゆくのであろう。しかし、そんな気持でいると精神まで老いてしまうから、どんと開き直って老いを楽しんでやろうという俳句である。

下り立てば風花舞へり山の宿　　村杉清吉

車で向かった山峡の湯宿であろう。空は晴れているが風は冷たい。宿に着いて車を出ると、ひらひらと風花が舞っている。二山も三山も越えて雪国からやってきた雪片かと思うと、愛しさが募ってきた。

初参講釈尽きぬ七味売り　　阿部幸代

初詣の神社の境内に露店が出ていて、その一つが唐辛子売りの店であった。ぺらぺらと立て板に水の講釈が続いているが、買う客は殆ど居ない。

落日の光あびたる冬木立　　西幅公子

夏の夕陽に比べれば弱く時間も短いが、夕陽を浴びた冬木立は、新たな命を得たかのごとく輝いている。

水琴窟

（水明集二月号鑑賞）

池田雅夫

山茶花や病者に告ぐる美しき嘘　佐々木史女

「山茶花」は椿に似た花で、晩秋から冬にかけて咲く。俯いて歩く人の目にふれにくく、散り始めてから山茶花に気づくこともある。大病を患ったのであろう。病名を伏せてやむなく「美しき嘘」に至った家族の思い遣りに心打たれる。

旨さうに夕日呑み込む大枯野　横山礼子

比喩もここまでくると拍手を送るほかない。それにしても「旨さうに」とは驚く。「夕日呑み込む」にみごとにつながっている。読み返しているうちに、「なるほどそうだ」と納得を強いられたような気がした。豪快な句に魅せられた。

銀杏散る飛行機雲は淡く消え　外村紀子

何々色とはっきり言わずとも表現できることを教わった。銀杏の黄、飛行機雲の白、そして空の青。大空を塗りつぶす三色が鮮やかに想像できる。散る銀杏の、消える飛行機雲の時間をも言い尽くしている器量に感心した。泰然たる日常裡。

貨物列車の連結のおと霜の朝　石関六弦

「貨物列車の連結のおと」に着目したことを讃える。走りだすときに連結部がことさら大きな金属音を発する。特急列車や電車では聞くことのない音なのだ。「霜の朝」がいい。

渡り鳥降り立つ湖や波光る　後記朝香

「波光る」の描写がいい。渡り鳥の動きや数、湖の広さ、風の強さをはかり知ることができる。単に「渡り鳥」といっても種類が多く、大きさ、数もさまざまに入り混じっている。人間社会と関係なく自然の摂理に従う鳥を讃歌している。

峡の空わきでるやうに小鳥くる　榊原聰子

「わきでるやうに」は実感であろう。山峡の狭い空ならではの観察に共感する。秩父は千メートルを越える山々が連なり、そこから谷深く川が流れてゆく。鬼石の町もそこに隣接する。狭い空だからこその表現に臨場感が伝わってくる。

晩秋の日は音をたて沈み行く　奥山粉雪

落日の音とはどんな音であろうか。いやいや、音そのものがない。それをあえて「音をたて」と詠んだところに趣を感じる。冬の気配がひしひし迫る晩秋。色あせてきた大地を真っ赤な太陽が燃やすように「沈み行く」のだ。メラメラと。

賑はひを指差す吾子や熊手買ふ　染矢峯雄

さいたま市には大宮の「十日まち」と浦和の「十二日まち」がある。いわゆる酉の市と同様のもの。幼子を連れてやってきた。参道にならぶ出店とその人混に興奮している子の姿がみてとれる。きらびやかな「熊手」を買うはめになった。

木の葉舞ふよろづ屋傍の精米所　森和子

ひと頃は街なかで「無人精米所」をよく見かけたものだが、数が減ったとは云えふとしたところで見かけることがある。玄米は虫がわかないので保存に適している。「木の葉舞ふ」ころはまさに新米の時期。「よろづ屋」が郷愁をさそう。

柿収穫時期を鴉と相談す　川島夕峰

秋の原風景として木造民家と庭の柿の木が思い出される。青いうちは渋く、朱く色づいてきたらもう食べごろであるが、中にはまだ渋いものもある。鴉は甘い柿しか食べないので、甘いか渋いかを鴉に教えてもらいたいと思っているのだ。

賽銭が後から降る酉の市　川村治

コロナ禍で自粛していた外出も少し緩和され、酉の市に活気が戻ってきた。あまりの人混みに賽銭箱のはるか手前から賽銭を投げ込んでいる。「後ろから」に混雑ぶりが窺われる。

冬かぼちゃ叩けば夫の腹鼓　髙橋満耶子

昔の冬は野菜が少なく、その時期にも保存がきく「かぼちゃ」が貴重で、冬至には、栄養価が高い南瓜を風邪予防にと食する習慣がある。丸くて重い南瓜を叩いて、それを「夫の腹鼓」としたところがおもしろい。よく鳴る太鼓腹であろう。

冬の山耐へぬくすべを授かりし　畠中八重子

木の葉を落とし剥き出しの林、ごつごつとした岩肌など、冬の山は静かで身を固くしている。吹きつける風にも、深々と降る雪にもじっと我慢をしている冬の山。「耐へぬくすべを授かりし」に、春を待つ大自然の摂理が現われている。

砂利道によろけし先の花八手　緒方みき子

別名「テングノウチワ」と云われる八手。常緑で逞しく、初冬の枝の先から白い円錐形の花穂を出す。日陰にも強く庭隅や道端にも植えられる。足場の悪い「砂利道」で「よろけて」しまった。「おっと危い」と天狗様の手が伸びる。

鎌倉の谷戸の冬空舞ふとんび　寺町知子

三方を山に囲まれている鎌倉。六国見山など、複雑に入りくんだ地形に隊道や切り通しが多い。「谷戸」にふさわしい冬の鎌倉は「とんび」には絶好の棲息地にちがいない。

網野月を　選

山紫集

平積みの本の一冊春近し　阿部幸代

薪の嵩窓より低く春近し　田中章嘉

手品師の繰り出すリボン春隣　松井由紀子

栄転の噂ポツポツ春近し　池田珪子

さりげなく席立つ女春近し　檜鼻ことは

酒蔵に杜氏聴く音春隣　越田栄子

口笛は昭和の演歌春となり　菅原卓郎

終電の酔客ひとり春近し　元田亮一

梱包のプチプチ潰す春近し　山中いちい

春近し棕櫚の木肌のひるがへる　秋谷風舎

――以上特選

陽を溜めて命を洗ふ春隣　青木鶴城

春近し八十路の妻の爪アート　新　暦文

居酒屋の暖簾手招き春隣　新井孝麿

マネキンの軽ろき装ひ春近し　荒井倶子

春近し見沼の水面ゆらゆらと　飯田忠男

春近し道草の児の泥んこの手　池田雅夫

春近しえかき気取りてベレー帽　石田慶子
高架下に研屋来てゐる春隣　石川理恵
春近し隣同志の飾り窓　井上燈女
春近し鳶輪をかく由比ヶ浜　井上玲子
春近し丸めた背中しやんとせよ　井口俊晴
牧場の賑やかな音春近し　上戸千津子
家中の靴を磨いて春近し　内田恵子
山からの斧の音来る春隣り　梅澤輝翠
春信や練切菓子のあさみどり　梅澤佐江
学らんの釦きらきら春近し　大塚茂子
旅行ガイドに付箋貼る指春隣　大場順子
少し引くローンのカーテン春近し　奥山粉雪

農機具のエンジン始動春近し　加藤でん治
居間の軒ツララ日毎に痩せてくる　川村　治
春近し森に鳥の眼鳥の声　熊倉千重子
終盤の好取組や春近し　河野はるみ
二重跳びできたできるよ春近し　小駒さち子
老杉にのぼる水音春近し　後藤綾子
育ちゆく畑土の香や春隣　小林京子
春近し中古クラブの試打コーナー　近藤徹平
幼な子の登園準備春近し　榊原聰子
春睡し清書の筆を転ばして　佐々木史女
マネキンの短かきスカート春隣　笹本啓子
焼香の列足元は春近し　篠﨑紀子

泥濘に子等の足跡春近し　渋谷きいち　春隣「まだ厚手かな」迷ふ服　武田重子

清流に命の気配春近し　下川光子　隔離部屋コロナにも在る春隣　鳥羽和風

雨音はやさしきボレロ春隣　菅原真理　苔生したわらべ地蔵や春隣　外村紀子

歓声漏るる屋内プール春近し　杉浦理恵　春近し鯱豪快に水しぶき　仲田利子

裏道に気を配る猫春近し　鈴木藻好　春近し亀も槽より動き出す　南條さわゑ

駅弁リスト三つ丸つけ春近し　鈴木玲子　せせらぎに小魚群れて春近し　西浦千枝子

会席の椀のみどり菜春近し　諏訪サヨ子　山滑る岳樺起き春近し　西幅公子

春近し生まれ故郷の無人駅　関谷多美子　スニーカーの紐のほどけや春近し　野口和子

春近し近くて遠い田舎道　瀬戸雄二郎　暁のパン工房や春近し　野田静香

山峡の春遠からじ丸木橋　染谷風子　抜け道の木々の緑に春近し　野平美紗子

夢にみる制服姿春近し　反町　修　旅プラン思ひ回らし春近し　野村美子

リフォームの完成まだか春隣　髙橋満耶子　何かしら気忙しく過ぎ二月は　畑宮栄子

遠山の紫立ちて春近し　原田秀子　雑木林につい足の向く春隣　丸山マスミ

手に受くる水は優しき春近し　樋口元美　暮らし向き良くも悪しくも春近し　宮崎紫水

時刻む胎児の画像春近し　日高道を　心地好き鳥のおしゃべり春隣　宮崎チアキ

オープンカー得意気に去り春隣　福田千春　餌を撒く父子に鴨寄る春隣　本橋稀香

ケーキ屋のパステルカラー春近し　藤澤喜久　女の子スカートくるつと春隣　森　和子

春近し婚約指輪ひかりけり　保坂翔太　一陣の風のささやき春近し　森川義子

春近し歩ごとに揺るるおさげ髪　曲淵徹雄　春近し神社を巡り式予約　森下美智枝

イエスタディトゥディトゥモロウ春近し　正木萬蝶　春近し小瓶に分ける化粧水　森美枝子

春近し琺瑯鍋に花模様　町野広子　菜園の土ほこほこと春近し　森本早苗

刈上げを床屋に告ぐる春隣　松宮保人　段上の少女の笑顔春近し　山下ユリ子

幣揺れし井戸の水神春隣　松本光子　ガス工事迂回をせよと春隣　湯浅　和

新しき句帳に一句春近し　丸屋詠子　民宿の膳に明日葉春近し　横山君夫

山紫集作品評

網野月を

横山礼子

平積みの本の一冊春近し　阿部幸代

平積みにされたほんの何冊かの中の一冊に季語「春近し」を感じたのである。自宅の書棚でもいいだろうが、「平積み」から書店などを想像することが出来る。「平積み」された数々の書籍から目に留まったその「一冊」の装丁の春らしさ、題名の軽やかさを感じたのではないだろうか。もしくは「春近し」の心持ちから、見出した「一冊」なのかも知れない。本句は取り合わせの句である。中七の後の切れに、「一冊」を見出した瞬間を永遠に止めてしまう力がある。

薪の嵩窓より低く春近し　田中章嘉

北窓を覆うように積み上げられた「薪の嵩」が、いつの間にか窓枠の高さよりも低くなっているではないか。その「低く」なっている様に春の訪れを感じ取っているのである。勿論、一冬を過ごして薪を燃やし続けてきた証なのであり、そうした一冬の時間の経過と作者の経験した事事の回想が込められている。室内から見た景ともとれるが、筆者は屋外にいた作者が見た景ではないかと考えるのである。

手品師の繰り出すリボン春隣　松井由紀子

実にいろいろな物物に人間は春を感じるものである。その物物は色合を持っていて、また動きを持っている。本句は、色鮮やかな「リボン」と「繰り出」される動きを伴っていて、衆目をあつめているのである。ただ、それだけでは「春隣」にはならないのである。物物の色合いと動きを期待して春待つ作者の心持ちが春を先取しようとしているのである。季語「春待つ」よりも「春近し・春隣」の方がより客観性を有していて、作者の想いを上五中七の句意に託して、その想いを突き放したところに作りものではない自然さを感じた。

栄転の噂ポツポツ春近し　池田珪子

座五の季語「春近し」を時季の設定として句中に置いている。世間でも、作者の身の回りでも「噂」が出始めた頃合いなのであろう。その中には「栄転」とは逆のベクトルや方向違いのベクトルを持った「噂」もあるに違いない。しかしながら作者は「栄転の噂」だけを聞き取っている。これは人生を経験してきた人の心の知恵なのである。季語「春近し」に込められた期待のしなやかで温かみを感じる一句になっている。「ポツポツ」のオノマトペは片仮名表記で現代性を表出しているが、平仮名書きの方法もあるように思われる。

さりげなく席立つ女春近し　檜鼻ことは

上手い叙法である。上五中七の「さりげなく席立つ女」ならば必ずしも全てに「春近し」を感じるものではない。「さりげなく席立つ女」に「春近し」をたまたま感じ取ったという意味である。句の外にある、表現しきれていないシチュエーションが存在しているのである。ということは逆は成立しないのである。ただ本句では、上五の「さりげなく」に春との関係性において百分の一の必然を感じさせるものがあるのだ。韻文の力というものであろう。

酒蔵に杜氏聴く音春隣　越田栄子

作者が「聴く音」ではないのである。「酒蔵に」「杜氏」が聴いているのである。勿論、春のことぶれを聞き取っている杜氏は、出来具合を吟味しているのであろう。音だけではなくて、諸味酒の色つやを見て、匂いを嗅いで、口に含んで味わいを確認するのであろう。つまり「聴く音」の「聴く」には分かるの意味が含まれているであろうし、「音」には諸味酒の発する全ての声が表現されているのである。昨今の酒造りは一年を通して行われる。春先の仕込みはどのような銘酒を作り出すだろうか。

口笛は昭和の演歌春となり　菅原卓郎

作者自身の口笛でも良いし、誰かの口笛が聞こえてきたのでも良いだろう。昭和も九十八年となっている訳だから、口笛の主は相応の年配の方である。屋外の景であり、口笛を吹きたくなるような空気感は自ずから、季語「春となり」で担保されている。筆者は、作者自身の「口笛」と考えたい、何時の間にか「口笛」を吹いていた自分自身にびっくりし、またその曲が、あの時の「演歌」だったことにもう一度びっくりしているように思えるのである。

終電の酔客ひとり春近し　元田亮一

本句では、「酔客」は女性とも男性とも言っていないのだが、男性の方が似合うように思う。筆者の見てきた終電の経験からそう思ってしまうのかも知れない。座五の季語「春近し」と上五中七の句意の必要十分条件のような関係性を想像する構成ではない。上五中七の景から「春近し」を感じ取っている、と解した方が良いようである。ただ「春近し」であるから、作者はこの「酔客」にペーソスを感じつつも、ある種のシンパシーを禁じ得ない心持ちであるに違いない。

梱包のプチプチ潰す春近し　山中いちい

作者の性格が余すところなく表現されている。作者は第三者の行動を見た景である、と言い訳するかも知れないが、これは紛れもなく作者の行動なのである。なぜなら座五に季語「春近し」が置かれているからである。「プチプチ潰す」作者は春を感じ取っているのであって、作者でなければ感じ取ることの出来ない情趣なのである。

春近し棕櫚の木肌のひるがえる　秋谷風舎

この「棕櫚の木肌」はいわゆる毛苞（けづと）であろう。かつてはこの毛苞を剥いで解して棕櫚縄を綯ったものである。昨今は、「ひるがえる」までに放置されて、「春近し」と言いながら、少々哀れな景である。手入れの時期を迎えたと解した。

大村節代 選

鼓笛集

躍り食ひ白魚六腑に迷ひ込む
白魚の黒目が睨む卵綴ぢ
椀の中白魚躍る一の膳

北山建治郎

よき寝覚め窓を開くれば春寒し
水しぶきダム放流の雪解水
すれすれを滑空したる燕かな

反町　修

春泥を物ともせずに万歩計
うかれ猫屋根はピカピカ緑色
湾刃の音なき波や春の海

綿貫ひさの

浅き春黙々と押す耕耘機
紅梅の踊り出でしや庭木立
年経れば絵馬堂黒し梅真白

阿部幸代

卒業子ハンバーガーを半分こ
花冷や鬼殻焼をもう一本
三猿の庚申塔を春の雪

染谷風子

石段の阿弥陀くじめく冬木影
馥郁と空押し上ぐる梅の里
重宝な辞書は絶版建国日

森美枝子

ひつそりと淡き緑の水菜噛む
白魚やすべてを透かし生きてをり
髪切りて首竦めては春浅し

山中いちい

角打ちに一見同志寒に入る
指先は「弱」を抓みぬ春隣
丘陵の先へさきへと梅探る

加藤でん治

吹く風に木の葉擦り合ふ二月尽
薄日差す部屋の温もり春近し
梅匂ふ蒼天の枝生き生きと

千坂平通

和箪笥の畳外や春の昼　新井孝麿

令和なる声の小さき鬼の豆
藤の房微笑みかへし人集む

蕗味噌をつくるリズムや割烹着　野村美子

春近し「青年の木」の贈り物
庭に咲く今朝の供花の黄水仙

恋知らぬ乙女ではなし紅椿　横山礼子

韓流のドラマは佳境春の猫
懐かしき匂ひまであり春の夢

御衣黄の花よと犬に聞かせけり　秋谷風舎

ぶらんこよ暫く休め風の音
頬撫づる香は梅干や渚道

屠蘇祝ふ夫の家伝の御重箱　武田重子

しもやけの足が疼くや立見席
子の門出家にひとりや母の春

気塞ぎの友の一歩や草青む　畑宮栄子

お揃ひのジャンパーはおり土手青む
寒風に立ち向かひゆくシングルマザー

水明通信

奈良には旨いものなし　秋谷風舎

ごめんなさい。「奈良には旨いものなし」と言われています。柿の葉寿司など、旨いと思ったことがなかった。

二上山山麓の道の駅に車を置いた。妻と山麓を歩いて当麻寺の牡丹を目指した。途中、行列の店があった。帰り道、行列していた店に入った。フルーツカフェ店だった。パンとフルーツと野菜の盛合せとドリンクのセットメニューがあった。ウエルカムドリンクが、グレープフルーツの生ジュースだった。野菜の盛合せには、店特製ドレッシングをかける。サンドイッチ、フルーツ、極上の美味しさだった。妻は土産に、ドレッシングとグレープフルーツ三つを買い込んだ。その後、葛城のフルーツカフェ店には、月一程度、明日香村等に出かける朝、立ち寄るようになった。フルーツカフェ店の本店は、天の香具山と三輪山の間にある。青果店で果物はどれも旨い。一年後、吉野の花まつりを見に行く途中、本店で柿の葉寿司を買った。蔵王堂の横では、餅つきをしていた。花まつりを見ながら、柿の葉寿司を食べた。初めて美味しいと思った。妻は飛び入りで餅つきに加わった。杵は桜の枝だった。

会社ＯＢのＫさんを誘った。葛城のフルーツカフェ店でモーニングを食べてから、山の辺の道を歩いた。大神神社前の駐車場に戻って、お昼にしましょう。とＫさんに声をかけると、Ｋさんから、朝のお店に行きたいと言われた。この日は、朝食も昼食も葛城のフルーツカフェ店になった。

鼓笛集作品評

大村節代

躍り食ひ白魚六腑に迷ひ込む　北山建治郎

早春の季語白魚を詠んだ三句。よく纏まっていて、その通りと共感する。

躍り食いをした白魚が、生きたまま六腑に到達するのかと思いながらも、人間の傲慢さを思い知らされる。生きるとは他の命を奪う事でもあるので、躍り食いや活き造り等、必要以上に苦しみを与えてはいけない。他の命を貰わなくては生きられない者は、奪われる命に敬意をはらって、一気に殺さなくてはと思う。

水しぶきダム放流の雪解水　反町　修

黒部ダムだろうか。雪解水によって、ダムが大量に放流され、早春の喜び、生への息吹が伝わる。雪解水によって、山も春を迎え、植物や動物が動き始める。やっと冬に別れを告げ、活動を始めよう。

春泥を物ともせずに万歩計　綿貫ひさの

万歩計をぶら下げて早足で歩く人。歩数一万歩を目指して、前を見つめて、口を一文字に結んで歩いている。いやあ一万歩なんて歩かなくても、七十歳を越えたら五千歩位でいいのではと言う声にも耳もかさず、春泥の道を颯爽と行く。おそれ入りました。

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解）　篠﨑紀子

失ふも得るも晩年山笑ふ

ここ数年、知人、友人、兄姉が亡くなり失望と悲しみの日を送っていた折、長女夫妻がマンションを紹介、見学に行くと玄関を上がり正面に冠雪の富士山が待っていた。即決、昨年初冬に住み、今は毎朝富士山に励まされ勇気と希望の日々を送っております。

網野月を（水明）作品10句

恋日和

ナイフには刃霜には光あり
山眠る眠れずにゐる無垢の人
待つ希望待たれる希望月時雨
霜晴の足跡二つ恋日和
恋日和何にも無くてわが枯野
翼の中へ何か隠して冬の鳥
悴け鳥を励ましてゐる悴けびと
冬の朝目覚し時計鳴る前に
春を待つ電車待つ人腕をくむ
すまないなあと男女の糸や雪滴

あみの・つきを
一九六〇年埼玉県与野市生まれ。
「水明」同人。二〇二二年かな女賞受賞。現代俳句協会会員。
句集に『岩ひばり』（合本）。

吉川拓真　NEW AGE 俳句の未来人

よしかわ・たくま
一九八八年生まれ。
埼玉県さいたま市出身
「水明」所属

焚火

炬燵へと徐々に集まる家族かな
裸木の肌の輝く旧校舎
毛糸編む祖母に心の解けゆく
住人の影ありしかな雪達磨
此岸の灯消えぬ勤労感謝の日
日向ぼことといふ衣はぶかぶかで
冬帝や冷たき椅子に空きのあり
焚火から生まるる焚火の思ひ出
閑かなる工事の音のクリスマス
手締め終へかたまつてゐる寒さかな

「水明忌」に集う

井口俊晴

二月二十五日、「水明忌」が浦和コミュニティーセンター第十三集会室で催された。この日の兼題である「春浅し」そのままの、晴れてはいても、風が少し冷たい浦和駅前に、急ぎ足で改札を出て来る水明会員の姿が見られた。

受付開始は十二時。番号が書かれた封筒に入った短冊に、兼題句と当季雑詠合わせて二句を書く。投句締切は十二時半。参加者は主宰はじめ四十六人なので、合計九十二句が集まる。

清記、選句と慌ただしく時間が過ぎるなか、午後一時四十五分に選句が終了。選句は主宰が多選、雪欄作家が十句、一般参加者が五句。その後、日高道を総務部長の司会で開会が告げられ、水明の礎となった長谷川秋子、星野紗一、星野光二の三代の主宰に黙祷を捧げた。続いて水明俳句会の歴史を踏まえた山本鬼之介主宰の挨拶となった。

いよいよクライマックスの披講と講評。

選句　主宰は多選

雪欄作家十句、一般参加者五句

披講　一般選　保坂翔太

雪欄選　曲淵徹雄

主宰選　山本鬼之介

主宰詠

回転ドアを入れど出られず春浅し

春風強く吹かせるは誰ぞ三主宰

主宰選

三極（天・地・人）

天

山国の一揆街道春浅し　風子

地

八橋の池の寂寥春浅し　佐江

人

薄氷や朝日に消ゆる恋一つ　昇

特選

吹つ切れて文殻燃やす浅き春　翔太

清明や塵一つ無き剣道場　道を

夭折の画家の自画像春浅し　稀香

天守なき石垣なぞり青き踏む　輝翠

リズムに乗れぬ回転木馬春浅し　静香

浅春や老樹小さき花挿頭す　由紀子

浅き春今朝は北向く風見鶏　ひさの

準特選

黒髪のままに終へたし梅東風と　拓真

皮目には飾り包丁春浅し　京子

マネキンの視線ハワイへ春浅し　徹平

急く心車窓いつしか春時雨　佐江

春雨や相合傘の老夫婦　修

白梅やかをり控へ目忌を迎ふ　はるみ

高階の視野に堂塔鐘霞む　義子
豆腐屋の看板猫や寒日和　章嘉
甚五郎の「つなぎの龍」や浅き春　茂子
浅春の風掻い掘りの池乾ぶ　和葉
溜池の堰切る勢雪解水　更穂
むさし野に鳶の丸描く浅き春　栄子
ありたけの土筆摘む母戦中派　稀香
恋猫は円月殺法屋根の上　俊晴

普通選

春袷位牌抱くとせがむ母　義子
春浅し雌に纏はる雄烏　章嘉
早春のひかりの中を巡航船　茂子
微笑みて菩薩見る世の春浅し　和葉
風届き水明晴れや浅き春　更穂
起きがけの厨しづもり春浅し　栄子
ほろ酔を委ぬる湯舟春の宵　稀香
蕗味噌やお国訛の定食屋　俊晴
春浅し遺影の母の薄化粧　鶴城
如月忌子の手に余る金魚塚　修
春浅し腰曲がりても口達者　翔太
春浅し朱書の多し農暦　眞理子
幼子と絵本開きて春浅し　はるみ
春浅し目引袖引秋子かも　真理
理由なく反抗する子春浅し　徹雄
取り敢へず牛筋煮込みを浅き春　公子
ねねの道白き頸に風光る　道を
春浅きこの地に秋子眠りしか　月を
東風吹けり千鳥ヶ淵の水面より　香音子
春浅し双子向き合ふベビーカー　光子
春浅し摩りて癒す向う頸　悦子
スキャットに譲る木道春の雲　倭子
小桜の挿木も芽生へ秋子の忌　節代
おかけなさいと書かれた椅子に浅き春　きいち
秋子師の匂ふ遺影や梅二月　暦文
常しへの教へ溢るる春の水　拓真
浅春の蹠にやさし堤かな　京子
待ちわびし家出来上がる浅き春　喜恵
母のものより雛の着物のペアルック　昇
春浅し前髪揃へ決まりをり　徹平
女童のおとなひ来しや紅椿　章嘉
飾る日も納むも雛の髪なづる　輝翠
岩かげの鯉そろり浮く春日影　治子
春浅し吉報を待つ朱印帳　静香
梅咲いて里に光の遊び出す　チアキ
幕間のロビーに咲かす春の綺羅　美智枝
春風や「山紫・水明」言祝げり　水尾
春浅し梢を撫づる日の迷ひ　宣子
春光や笑顔の二杯目赤ワイン　由紀子
見上ぐればうるむ師の星春の星　茂子
春めくや赤子這ひ初む目の光　和葉
逍遥の五感生き生き浅き春　更穂
春浅く石兎哀しむつきの宮　栄子
　　稀香
　　俊晴

全ての披講が終了した後、主宰の講評があった。主宰は時に冗談も交えながら、一句一句丁寧に鑑賞。時には「中八は絶対やめて下さい。リズムが悪くなる」と厳しい言葉も。また、「水明忌」はそれぞれ亡くなった日が違うので季語としては扱えないとした。

主宰から三極に色紙、特選には短冊が授与された。なお、高得点者には水明から記念品が贈られた。

高得点者

一位　保坂翔太
二位　綿貫ひさの
三位　本橋稀香
四位　大場順子
五位　松本光子
六位　染谷風子
七位　森川義子
八位　大塚茂子

最後に網野月を幹事長が閉会の挨拶をして、午後四時四十五分、水明忌を終了した。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木　和子　報

春の宵人形振りの立女形　マスミ
機音のくぐもるリズム春寒し　〃
春寒やカッター立つる波しぶき　亮一
魑魅魍魎にまたも振仮名春寒し　徹平
振袖の袂に消ゆる斑雪　喜恵
序の舞や振鈴ひそと春淡し　節代
匂ひ無きモデルルームや春寒し　治子
帽高く振りて別るる寒き春　和子

――以上特選

春の燭女形の振りの色気かな　延昭
振り逃げに遠き一塁春寒し　徹平
楽しげに首の鈴振る仔馬かな　京子
息子より振込み通知春ごころ　はるみ
春寒し今は名のみの富士見坂　喜恵
春寒しやや俯きし散歩犬　和葉
春の夜や来し方独り振り返る　亮一
春寒し湖を見つめる少女像　節代
待春の思はせ振りなメールかな　チアキ
泣く声か絵馬きしむ音春寒し　治子
春寒や閼伽桶なべて土埃　稀香
振出しの一味おつとと浅蜊汁　由紀子
春寒や赤き衣を選る衣裳部屋　順子
春寒し波頭に白兎翔ぶごとし　マスミ
春寒や振子時計の硬き音　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城　報

一灯また消えて定かに春の星　竺仙
下萌や帝釈天は寅さん似　〃
星朧母逝きてより半世紀　敏江
うなじ見せ咲くカタクリの無口なり　〃
春星や光纏ひて塔聳ゆ　峰雄
擦り切れたモノクロ映画春の星　いちい
雲滲むビリーホリデイ朧月　士史
春の星祈りを幾つ数へたる　鶴城

――以上特選

母の日の便りめきたる梅一輪　竺仙
下萌やここよりそこの緑濃し　いちい
無限かな雨しとしとと下萌る　士史
啄木の若き日の句碑下萌る　敏江
街の灯の点る夕暮春の星　峰雄
誰が植ゑし小さき菜花勢揃ひ　リコ
海馬失せるそれも幸とや春の星　みどり
下萌やマグマの滾り地の鼓動　鶴城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

船頭の唄に雪舞ふ猊鼻渓　理恵
凍豆腐北国の陽に卓ぬくむ　〃
蔵王颪に吊るして哭かせ凍豆腐　順子
凍豆腐とうふの角の噺など　萬蝶

笊二つ星にさらせり凍豆腐　雅夫
春兆すトングに軽きクロワッサン　昇

―以上特選

月影に深き廂や凍豆腐　順子
しがらみも乾きからから凍豆腐　理恵
人伝に知りし友の訃凍豆腐　徹雄
諍ひの後に甘めの凍豆腐　萬蝶
入相に犬の遠吠え凍豆腐　星歩
山焼の煙躍らぬ日和かな　雅夫
凍豆腐で一盞交はす峡の夜　康世
母恋し煮浸し恋し凍豆腐　昇

第四例会（浦和）

境　延昭
石井喜恵　報

鳥たちが飛翔を競ふ春隣　翔太
水仙を供花とし香り分かち合ふ　玲子
新粧の和菓子の包み春隣　寛治
遠山の風姿ぼんやり春隣る　でん治
始発駅指呼きびきびと春隣　マスミ
さ小舟を舫ふ岸べり野水仙　延昭
水仙のスロープ海へ迫りけり　修
半切に筆の走りや春隣　喜恵

―以上特選

新刊の旅ガイド買ふ春隣　由紀子
林立の柱状節理野水仙　恵子
鶴頸にひともとが佳し水仙花　順子
パスポートの日付確かむ春隣　昇
春隣マーカーペンと時刻表　暦文
然りげ無き少女の会釈春隣　延昭
畦道は軽トラの幅春近し　光子
野水仙活けて岬の風立ちぬ　玲子
水仙や母の形見の硯箱　寛治
越の海の怒濤に対ふ水仙花　マスミ
春近し遠峯に雲の光り合ふ　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ　報

春寒の卓に訃報の走り書き　義子
行き暮れて急ぐ嵯峨野路春寒し　玲子
薄氷や人差指のいたづらに　はるみ
薄氷やはかなき恋のごと消ゆる　宣子
公園の池の薄氷鞠ひとつ　美佐尾
能面に見つめられゐて春寒し　水尾
料峭の父母の墓前の空耳よ　佐江
金色の一葉閉ぢ込め薄氷　〃

―以上特選

薄氷の溶け始むるを鳥走る　理恵
土間奥の漆喰蔵や春寒し　宣子
薄氷に鋼光りの重さかな　水尾
春寒し隣家の猫が纏ひつく　義子
薄氷や放生池の鯉さより　玲子
春寒し寺の廊下の足のうら　美佐尾
手水場の柄杓留め置く薄氷　はるみ
棋王戦なる秒読みの声春寒し　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子　報

波音に和歌口を衝く実朝忌　マスミ
春めくや床の掛字は「壺中の天」　〃
実朝忌ひそむものなき波の裏　ひろこ
立春や一番鶏のたからかに　はるみ
実朝忌彼の日のままに段葛　佐江
宮廷へ憧れ遥か金槐忌　京子
江ノ電で一日さ迷ふ実朝忌　萬蝶

―以上特選

書き込みの多き原稿春時雨　マスミ
荒東風や原つぱのござ攫はるる　慶子
鎌倉の海は縹に実朝忌　佐江
鰊漁大海原にしぶき上げ　星歩
目覚めたる原生林に雪崩かな　京子
跳ね仔馬原つぱ狭し空青し　俊晴
けふの鎌倉海は鈍色実朝忌　はるみ
源流の暗さが夢に春の風邪　ひろこ
亀鳴くや原子炉の村ひとの無く　鶴城
立春や睨み残れる鰯の目　千春
春めくも大台ケ原の深眠り　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

佐保姫の望む出土の青銅鏡　玲子
褒めごろしするな触るな牡丹の芽　ゆら女
山肌の見え始めたる雨水かな　千津子
山裾の村ひそとして春浅し　洋子
少年に髭生ゆ兆し雨水かな　道子
大玄関にどつと履物盆梅展　和子
鶯や補聴器つけたりはづしたり　千枝子
頬撫づる風瑞々し雨水かな　早苗

――以上特選

よれよれに身も世もなくて猫の恋　ゆら女
神馬少しお疲れ気味の二月かな　洋子
王羲之（ぎし）の臨書にはげむ雨水の日　玲子
雪の夜の不安響かせ救急車　千津子
釣具屋の魚拓はね出す雨水かな　和子
末黒野にひしやげるバケツとごろた石　道子
折り矯めて活ける花木や竜天に　千世子
淡島や四万本の針供養　満耶子
音もなく雨水に煙る紀州冨士　千枝子
八十路過ぎ体力つくる二月かな　きわゑ
万物のすべてが動く雨水かな　嶋田洋子
廃寺に一基三重の塔繁縷（はこべ）生ふ　早苗

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和五年二月二十八日現在―

由良ゆら女　20口
多根敏江　5口
井上燈女　5口
五明　昇　10口
曲淵徹雄　10口
松本光子　20口
石山かつ子　10口
福田千春　3口
内田恵子　10口
山口富子　3口
星野和葉　10口

水明忌より

大村節代　1口
丸山マスミ　1口
大塚茂子　1口
野田静香　2口
日髙道を　2口

小林京子　1口
石井喜恵　1口
青木鶴城　2口
越田栄子　1口
梅澤輝翠　1口
小倉倭子　5口
矢作水尾　1口
保坂翔太　1口
森川義子　1口
反町　修　2口
河野はるみ　1口
大場順子　2口
山岸久美子　1口
松井由紀子　1口
岡田宣子　1口
柚木治子　3口
松本光子　1口

―合計139口―

各地句会

柿の木塾（浦和）

胸底の鬼追ひ出せず雪解川　恵子
巫（かんなぎ）の固き正座に余寒なほ　昇
遠山は日に日に黒く雪解かな　俊晴
肥後守（ひごのかみ）で削る鉛筆余寒かな　節代
露天湯の肩を余寒の風抜くる　和葉
門の真一文字に雪解かな　水尾
いきいきと大河へいそぐ雪解水　かつ子
コンサート終ふ夜空を仰ぐ余寒　和子

俳句の手ほどき（岩槻）

観梅の枝の彼方に三河富士　水尾
すぐそこに初島見ゆる梅見茶屋　義子
道真の念（おも）ひを今に梅見かな　翔太
愛犬に行き先を告げ春コート　幸代
先人の智恵知る春の歴史館　美子
観梅や花香に見入りはぐれたり　久美子
真先に手を上ぐる顔入学児　忠男
四阿へ爪先上り梅真白　延昭
梅見茶屋まあるい背が寄り添うて　倭子
烈公の遺徳を偲びつつ梅見　佐江
酒二合酌みて軒端の梅見かな　卓郎
観梅や「月の桂（かつら）」に逢ひにまた　桂子
山盛りの独活の先付峡の宿　徹平
揃ひ半纏先供走り春まつり　かつ子

円卓の会（浦和）

闊歩するマヌカン少女春早し　道を
騙し絵の絡繰見えず亀鳴けり　静香
亀鳴くや甲羅干したる後先に　輝翠
早春の無人販売籠二つ　亮一
蕗の薹バスに手を振るいつもの子　翔太
笹舟のレガッタ青き空の下　修
髪飾る女神主三の午　月を
ことことと春菊の香を染めにけり　鶴城

たかんな俳句会（川口）

里山の薄紅色に春早し　久美子
私生活話したがらぬ官女雛　のり子
早春はもどかしくもあり雲重し　ふくみ
早春のゼブラゾーンを渡る鹿　小麦
春菊を摘む坪庭の夕明り　義子
生きるとは迷ふことなり遍路杖　鶴城
早春や新造船の槌の音　水尾
早春の海を車窓に画学生　静香

神戸大池句会（神戸）

水温む廊下に響く笑ひ声　玲子
駐車場の砂金の光春の霜　千津子
野暮天が兎を探す朧月　早苗

水明松本句会（松本）

庭の木々息をひそめて寒を待つ　陽子
墨汁を顔まで飛ばし書初す　マリス
子等の声花が咲くよなお正月　玲子
いとけなき曾孫等駈け来るお年玉　寿子

若鮎句会（浦和）

隣人を愛せよ建国記念の日　拓真
農婦饒舌農夫寡黙に耕しぬ　稀香
耕せし土温温と高笑ひ　順子
早春の街へ風切る人力車　紀子
東風吹くやネットで探す次の旅　秀子
黒髪のうなじあらはに東風ぞ吹く　さなえ
耕しや力を宿す土の色　芳春
洪鐘や東風吹かれける段多し　香音子
朝東風や我が青春の十条駅　月を
礼参り東風に押されて男坂　鶴城
耕人の声豊作の予兆あり　喜夫

和歌山水明句会（和歌山）

俎はタンゴのリズム春立つ日　和子
祭神の名前の読めぬ梅日和　道子
豆撒くや鬼とは何か知らぬ児が　千枝子
まるまりて自転車をこぐ雨水かな　千世子
分身のシルバーカーよ浅き春　満耶子
数分を居眠りしたし春炬燵　きわゑ
八方睨みの夫の遺影や鬼は外　洋子
うなじより崩れはじむる雪達磨　廸代

野ばらの会（浦和）

指先に仄と移り香田芹摘む　秀子
前掛けにくるむ摘草匂ひ立つ　栄子
諳んじて摘草五種を小さき手に　夏江
沢音に覚めし大地や蓬摘む　茂子
草摘むや「待て」も程程犬飽きる　みき子

ミモザの会（横浜）

節の豆年齢端数のみ食べる　栄子
バレンタイン歪なチョコは誰のもと　由美子
足取りは軽やか春の歩道橋　詠子
金婚やぽそりと夫へバレンタインチョコ　史代
バレンタインデーから始めようダイエット　亜弥子
たそがれの生にもバレンタインデー　萬蝶
早春の光の中を母出棺　玲子
先生にもらふ無念やバレンタインデー　慶子
悄気返る子をそつと抱きバレンタインデー　千春

水明澪つくし句会（大阪）

陽炎をかき分けてゆく試歩の杖　洋子
陽炎に憂へ異国の大地震　智恵子
かげろふの猫に一声犬猛る　人美
春の雪ラテンの調べ溶かしゆく　きりり
ふつふつと心は老いず牡丹の芽　ゆら女

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

梅園のぬかるみに敷く藁筵　延昭
排気ガス浴びし老木梅咲けり　まき子
冬萌や車の下で眠る猫　淑子
引鶴や帰心叶はぬ紙の鶴　倶子
海山がモノクロとなる紀元節　俊晴
冬萌や土手をたどれば太平洋　早都子
冬萌ゆるスキップで行く赤い靴　健司
オムレツのふはりと焼ける建国日　美枝子
床上げの煮麺に割る寒卵　昇

繭の会（浦和）

街音をひたすらに吸ふ春の雪　風舎
春雪やとある酒場にまよひ猫　比早子
廃業の工場の窓に春の雪　まりこ
北國（はっこく）を指す道標に春の雪　さよ子
春の海沖の鷗もうきうきと　悦子
白銀の南アルプス辛夷咲く　風子
公園の端に辛夷の花盛　トエ
緑青ふく釣燈籠に春の雪　珪子
花辛夷あか児とともに育ちけり　夕峰
渡り漁夫猿公といふ沖言葉　月を
花辛夷きざはしを突く杖の音　鶴城
辛夷咲き青空さらに澄みにけり　京子

山茶花（浦和）

凍ゆるぶ太梁軋る仁王門　マスミ
凍解の庭土踏みて音を聞く　光子
川べりに土手一面に猫柳　美江子
暮れ泥む橋の袂に猫柳　綾子

蝌蚪の会（浦和）

雪の道歩幅小さく歩きけり　ひさの
野を駆ける児の風車光撒く　朝香
風車どんな色目が生まれるか　さち子
風車今や期待の発電機　風舎
君の街歩道橋から春夕焼　礼子
啓蟄や鳩に三枝のたとへあり　しるく
たそがれて歩をゆるめ春の月　元美
赤エプロンの水子地蔵やかざぐるま　月を
足元に男児の勲章春の泥　鶴城
初花や背筋気にして闊歩する　宣子

鶴川山百合句会（町田）

だんまりも主張の一つ藪柑子　雄二郎
一人鍋二つ作りて夫婦仲　月を
着ぶくれて両手短くなりしかな　喜久
一匁から始まるよ手鞠つく　史代
声佳きが一羽混りて寒鴉　広子
実千両少し華やぐ祖母の部屋　由美子
四、五盃に夫は饒舌年酒酌む　千春
話題なほ「三苦の一ミリ」小正月　萬蝶
実千両こぼれて七百両ほどに　理恵
初電話孫の一声「あけおめー！」　美千子
湾一望する霊峰の淑気かな　玲子

水明鬼石句会（鬼石）

呉服屋の消えて久しや針供養　和子
きさらぎの風にとまどふ子猫かな　ナヲ子
寒卵半分づつを思ひだす　洋子
幼子へ祖父のはりきり鬼やらひ　聡子
みかぼ嶺にとどまる日差し春ゆうべ　紀子

若狭水明会（若狭）

黒光りのかまどに安堵す年の夜　鼓
神棚の護符を入れ変へ年の夜　初花
一礼す一の鳥居や初明り　保人
里の名を頭に富士の初明り　和風
松の葉に止まるしづくや初明り　ことは
偕老の恙もなけれ年の夜　郁子
年の夜や太筆揮ふ癸卯　白鷺
神なびの社詣でや初明り　登美江
朝採りを供ふ三宝年の夜　八重子
年の夜の棒だら薄味京育ち　寛久

きざきサークル（浦和）

アルプスの雪解に逸る梓川　昇
女三人愚痴と噂の春炬燵　光子
声を出すための音読春炬燵　倶子
積ん読の数増すばかり春炬燵　和
春炬燵小さき画伯の被写体に　喜代子
雪解川鉄橋渡る一輛車　啓子
雪解風頬の突つ張りマッサージ　和枝
雪解風喰らうて駆けるサッカー部　健司
枝先のふくらみ見えて雪解光　和子

青葉の会（浦和）

たんぽぽを供花とし馬頭観世音　美紗子
薔薇の芽の紅そだち少女めく　真理
真砂女偲べば薔薇の芽太き生家かな　美智枝
閉ざされし旧家の門や春の雨　美子
薔薇の芽や返る言葉に棘ありぬ　啓子
いばらの芽に夢を託せし下校の子　公子
梅の香や経を聴き待つ開門を　洋子
目秤で選ぶ大根道の駅　和子
百年の代々の雛に供へ物　輝翠

光が丘俳句教室（東京）

能書きをせせら笑ふか春の風邪　はる
梅ヶ香や玻璃戸を過ぎる人の影　康子
下校児の鉄棒くるり草萌ゆる　典子
水仙のこの崖が無くなるといふ　理恵

芽吹句会（浦和）

洪鐘のわたる嵯峨野路冴返る　玲子
主去ぬるも馥郁たるや梅の花　チアキ
冴返る柔道場の青畳　修
蕗の薹広げ天ぷら開花せり　富子
春めきて電話の声に膝の癒ゆ　正子
開門へ名残の雪の華やげり　ひろこ
春佳き日バージンロードの扉開く　千重子
撫で肩の菩薩の微笑梅月夜　道を

野菊の会（与野）

君の名は王様ペンギン雪が来る　美代子
ペンギンの系図に乱れ柳の芽　和子
ペンギンは声を交して春隣　清子
抱卵のペンギン氷山崩れるよ　まな
のどけしや身ぶり手ぶりのペンギンショー　知子
ペンギンの行列愉快薄氷　光子

雛の会（浦和）

春夕焼戻らぬままの伝書鳩　喜恵
雁供養爆ぜる音して火の威勢　燈女
春雷や畳んだばかりの古本屋　輝翠
雁供養夢は見るもの為さずとも　チアキ
海凪ぎて静かなる雨雁供養　佐江

りそな俳句会（浦和）

子ら起きて弾ける笑顔春の雪　勲
掬ふ手に白魚はみな水の色　寛治
踊り食ひ白魚六腑に迷ひ込む　建治郎
白魚の目と目が合ひて止まる箸　久美子
飛び石を浮き立たせけり春の雪　暦文
はじめての喉越し一気しらを椀　道を
舞ひ降りて微かな温もり春の雪　京子
淡雪を手のひらに受くねねの道　マスミ
淡雪や轍に小さき靴のあと　雅夫

りんどう俳句会（浦和）

冠雪のあれが立山冬夕焼　君夫
冬夕焼移動販売待つ部落　翔太
廃業の友の涙よ寒茜　まり子
春日野に琵琶の余韻や寒夕焼　紀子
をとり啼き声に乱るる鴨の陣　卓郎
鴨の陣大将どこにも見当らず　寛治
夕闇に動くものあり鴨親子　治子
「正宗」に滾る武士道寒椿　風子
春場所や番狂はせの電車道　徹雄
梅東風や九十九折行く峠道　利子
鴨群るる懐深き多々良沼　サヨ子
幾山河越えて羽交の鴨親子　弘夫
水掻くも水に浮かぶも番鴨　順子

皐月の会（浦和）

淡雪や知らぬ女と傘の中　山菜
短命を知らずけなげや春の雪　更穂
春寒や寂する妹の白き耳　光代
からくさの切妻破風針供養　珪子
伊勢詣終へて安堵の建国日　順子
東風吹かばせめて塗り箸赤にする　紀子
春寒し朽ち始めたる難破船　静香
春寒や孫の首筋細すぎる　孝麿
列車待つまつ毛に溶くる春の雪　暦文
昔日の写真あれこれ建国記念日　美佐尾
枝先はとんがり帽子春寒し　きいち

櫻蔭句会（浦和）

春浅きしののめの空靴の音　千恵
紅椿地に落ちてなほ矜持あり　久美子
カルメンの真紅の衣装落椿　多美子
君の手をポケットに入れ春浅し　行雄
落椿ありて絵となる煉瓦道　美智枝
今朝の雨ひそと艶めく白椿　真理
大輪のみじよか椿は島育ち　茂子
物言はぬ主迎へて庭椿　雅子
開き初む少女の大志紅椿　由紀子
春浅し水流れ出す田代山　公子
春浅し萩の食籠京の菓子　美子
玉眼の仁王の一瞥落椿　幸代

芙蓉句会（浦和）

接骨院午後の静寂春寒し　正子
春時雨流れ静かに用水路　道子
注ぎ足しの醤油こうじや冴返る　税子
訃に接す魂にたむくる春時雨　仁
幼子の苦心して接ぐ雪達磨　美子

水明熊谷句会（熊谷）

いぬふぐり酒蔵巡りの千鳥足　正行
春の田に響む農機の試運転　卓郎
覇者眠る丘を彩る犬ふぐり　秀子
髪切つて身軽となりし建国日　燈女
建国日煮しめの味の変はらずに　栄子
ちよび髭の孝の肖像紀元節　徹平
父と子の思ひそれぞれ建国祭　茂子

水明小川句会（小川）

ふる雪や嬉しさ辛さ入りまじる　みや
雪の宿淡雪豆腐が腑に滲みる　綾子
膝の上乳飲むしぐさ子猫ゐて　きよ子
児と遊び風呂に溶けゆく雪うさぎ　栄子

珊瑚の会（浦和）

茨の芽野良着の袖の引つ掛かり　かつ子
行く先は決めぬ旅立ち春の山　喜恵
武州路に万葉歌碑や春の山　マスミ
秩父路の空押し上げて春の山　水尾
十州に連なる信濃春の嶺　昇
薔薇の芽や少女の指先光り出す　恵子
梵鐘の和みし朝の春の山　光子
薔薇の芽に棘人間に毒舌　史代
少しづつ人恋ふ色に春の山　和子
薔薇の芽や声よく通る四歳児　広子
小さくとも薔薇の芽先を見据ゑたる　和葉
春の山ひとりの幅の道続く　節代

櫟の会（浦和）

冴返る深呼吸して手術室　文子
蕗味噌や見やう見まねの母の味　富美子
ほつこりと寄り添ひ合うてふきのたう　千重子
凜として掛字の墨痕冴えかへる　敦子
蕗の薹神の与へし美味珍味　亮子
迷ひつつ土持ちあぐる蕗の薹　朋子
沖合に漁火揺れて冴え返る　妙子
海吠えて唸る天空冴え返る　裕誌
蕗味噌を舐めつつ空ける大徳利　彰二
冴え返る納戸に古き竈かな　克之
味噌汁にぱらり散らすやふきのたう　富子
蕗味噌の苦みにほろり盃交す　治子

めだか句会（浦和）

恋猫や自然の摂理感じ入る　敦子
艶やかな葉に乗る手毬沈丁花　美智
踏み石に庭下駄在りし沈丁花　知子
恋猫や集ふ場のなき街の夜　六弦
回覧板回す戸口に沈丁花　宏子
沈丁やその暖かき妻の膝　忠夫
生垣を抜けて来たやら浮かれ猫　はるみ
昨日も今日も遠回りして沈丁花　月を
思惑はいつも空振り浮かれ猫　鶴城

新樹の会（浦和）

やはらかに尿（ゆばり）の音色二月尽　徹雄
生か死かシェイクスピアの劇二月　平通
劇場の裏町通り夜半の春　清吉
鋤き返し黒土光る二月尽　修
劇通を気取るをとこよ山笑ふ　道を
新国劇は殺陣師が主役春時雨　風子
蒼天へ技生き生きと二月尽　鶴城

あゆみの会（浦和）

片栗の花に囲まれ一休み　山遊
木洩れ日に片栗の花光をり　重子
片栗の花少女はいつも俯きて　啓子
風誘ふ飛びたき思ひかたかごの花　和
羽搏ける鶴の帰心や二月尽　倶子
かたくりの花に宿りし我慢の気　藻好

俳句の国際化と季語
——正岡子規の俳句観を基点に
桜かれん 著

十七音の俳句に必要とされる季語。その文学的変遷と日本人の美意識を概観するとともに、「俳句の創始者」正岡子規の俳句観・季語観を浮き彫りにし、俳句を世界の詩として広める道を模索した画期的論考。

本書の主な内容
季語の発生について／季語の役割と新事象新題／新季語／無季俳句についての議論／日本と海外における現代の季語について／子規の俳句観・季語観と俳句の国際化 ほか

子規俳句における新事象と新題一覧 付

定価3,300円（10%税込）
四六判／上製／364頁
ISBN978-4-04-884514-4

KADOKAWA 発行：角川文化振興財団 発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008（ナビダイヤル）へ

令和５年水明全国大会のご案内

［と　き］　令和５年６月25日（日曜日）

［ところ］　さいたま共済会館

［行　事］　かな女賞・季音賞・水明賞・新珠賞
鼓笛賞・山紫賞の授賞
新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

親睦会、参加費、宿泊斡旋、申し込み、などは５、６月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは５月１日～６月５日にお願い致します）

水明俳句会　全国大会実行委員会

水明通信

貨幣博物館見学記

さいたま市　染谷風子

文春文庫に佐藤雅美著『大君の通貨　幕末「円ドル」戦争』がある。

開国の日本と欧米との金銀比価の違い（日本は一対五、欧米は一対十五）から、金価である小判が海外に大量流出した事件をテーマにした歴史小説である。それを読み、幕末の通貨に興味を覚え、日銀の貨幣博物館を訪ねた。東京駅から徒歩十分である。

二階の展示室は広く、和同開珎から現在まで千五百年の貨幣とその関連資料が展示されている。近世のコーナーは、江戸の金遣い、大阪の銀遣いを中心に特に充実した展示である。千両箱と銭一貫文の銭差は、実際に手にして重さや長さを体験できる仕組になっており、時代小説ファンには堪らない魅力である。貨幣には皆それぞれの歴史があり、丹念に見て廻ると時間を忘れる程である。

展示物は、説明に工夫がされており、小さなお孫さんを伴っての見学を推奨致します。

水明全国大会　兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼　題　「更　衣」（ころもがへ）　衣更ふ

「竹の秋」（たけのあき）　竹秋

※「更衣」「竹の秋」は右の季語で詠む事

「金」詠込み

※「金」は季語として使わない事。春の季語を入れて詠む事。

句　数　通じて二句（一組）

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料　一組につき千円

締　切　四月二十五日（発行所必着）

※投句用紙（水明三月号・四月号に添付）使用のこと。コピーも可。

水明通巻1100号･鳥羽谷通巻200号記念

若狭句碑めぐりバスツアー PART Ⅱのご案内(4)

水明通巻 1100 号・鳥羽谷通巻 200 号を記念する「若狭句碑めぐりバスツアーＰＡＲＴⅡ」まで１カ月余りとなりました。『水明』３月号に「バスツアー参加申込書」が綴じ込まれておりますが、申し込みはお済みでしょうか。申込締切を３月末に設定していましたが、まだ定員に余裕がありますので、最終締切を４月末に延期しました。会員多数の参加の下、楽しく有意義なツアーになりますよう皆様奮ってご応募下さい。

［記］

【期　　日】 令和５年５月 29 日(月)、30 日(火)、31 日(水)　２泊３日
【交通機関】 大型バス１台
【募　　集】 募集人員 40 名　申込締切４月 30 日
【担　　当】 バスツアー実行委員会、事業部
【参 加 費】 65,000 円（参加者 40 名の場合）
【旅　　程】

①発 着 地　さいたま市浦和区仲町・「玉蔵院」前
（出発午前７時、帰着午後５時）

②ル ー ト　首都高速・東名高速・新東名高速・北陸自動車道
（復路はこの逆）

③宿泊施設

【第１夜】三方五湖水月湖湖畔「きらら温泉・水月花」
☎ 0770 － 47 － 1234
＊翌朝クルーズ船で初夏の三方五湖を巡ります。（予定）

【第２夜】御食國（みけつくに）・小浜市内「ホテルせくみ屋」
☎ 0770 － 52 － 0020
＊翌朝、小浜お魚センターで海の幸のお買い物を楽しめます。

④観光地　三方五湖……レイククルーズ（予定）
鳥羽公園……「島津城子」「澤本知水･山本嵯迷」「宇田翠保」の句碑
瓜割公園……「長谷川かな女」「長谷川秋子」「星野紗一・明世」の句碑
ほか、小浜お魚センター、熊川宿、有名社寺・旧蹟、若狭箸工房など

◆本号をもって案内を終了とします。

主　宰　　山本鬼之介
実行委員長　五 明　　昇

風　声

○**俳句四季**二月号――「季語を詠む」欄

北窓を開き入る魂去ぬる魂　**鬼之介**

○**現代俳句**二月号――「現代俳句の風」欄

妹と酌む目刺のわたの沁み透る　鈴木和子

散り敷きて自刃の如く姫椿　青木鶴城

読み聞かす続きは夢で日向ぼこ　越田栄子

古暦ほらね良き日もあつたでしよ　杉浦理恵

冬座敷手斧目残る黒き梁　原田秀子

ねねの道ふらり寄り道蕪蒸し　丸山マスミ

寒濤やカフェの灯に聴く遠汽笛　由良ゆら女

○**くぢら**（中尾公彦主宰）二月号――「受贈俳誌美術館」欄

行平にいま会心の冬至粥　**鬼之介**

○**好日**（高橋健文主宰）二月号――「受贈誌御礼」欄

兄弟のやうに語るや思ひ草　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）二月号――「受贈俳誌紹介」欄

二度咲や光悦寺垣ある離れ　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）二月号――「受贈誌御礼」欄

二度咲や光悦寺垣ある離れ　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）二月号――「贈書紹介」欄

小田康枝氏の紹介により

星野和葉句集『永字八法』（東京四季出版）

「水明」同人。現代俳句協会会員。第一句集。昭和五十六年から令和三年までの句を収録。句集名は「筆持てば永字八法白木槿」の句から採られた。作者は「水明」四代目主宰の星野光二氏の夫人である。昭和五十六年に「水明」に入会し、「櫟の会」に所属され俳句を始められた。やがてめきめきと力をつけられ、平成九年に「水明賞」を、平成二十二年には「かな女賞」を受賞された。俳暦を重ねるごとに生来の感性の良さを発揮され、対象物を確かに目に留めて詠まれた佳句が多く編まれている。

陶枕に夢だけ残し骨董市

小さき影動く浅春の潮溜り

灯を消して狂ふ灯蛾を手なづけぬ

姉妹の笑ひ転げて夏の月

青年の歩幅五月を一直線

○**菜の花**（伊藤政美主宰）二月号――「諸家近詠」欄

語りかくれば応ふる馬の息白し　**鬼之介**

（日高道を抄出）

後記

胸が躍る四月、今年は特に軽やかな気持になりました。三年続いた新型コロナウイルスがやっと下降して、三月十三日以降のマスク着用は個人の主体的な自由と厚生労働省から発表されました。

去る二月二十五日の水明忌に参加された四十六名の方々も、まだ全員マスクを着けておられましたが、皆ほっとされているようにお見受けしました。二代主宰長谷川秋子、三代主宰星野紗一、四代主宰星野光二の三人を修した「水明忌」の様子は、今月号の井口俊晴氏の報告をご覧下さい。

マスク解禁、コロナも下降と喜んでいました。ところがコロナはネコ科の動物に感染、和歌山県の動物園ではライオンが感染し死んだ。インドの動物園やアメリカ、スペインでもライオンやトラが感染。人・獣間で高い感染率で、様々な症状を引き起こすとか。ヒトとネコ、ネコ同志の感染、人類共通感染症は初めてかも知れないと、日本獣医師会の学術誌に北海道の獣医師が報告されたようです。

新型コロナは三月にマスク解禁、五月からはインフルエンザ並の五類に引き下げるようですが、まだ気をつけなくてはと思います。

授賞委員会が白熱しています。新珠賞は昨年を上回る二十二人の方が挑戦されているので、委員の方々は懸命に選考されています。もう少しで受賞の方が決定し、五月号では晴れやか受賞者皆様をご報告ができると思います。あと少しお待ち下さい。

（節代）

二月号の「今月のはてな?」の記載の中、

「截金」の読みを「きりがね」と記しましたが、正確な読みは「きりかね」です。

お詫びして訂正致します。

「きりがね」と読む字は「切金」です。

「切金」は「きりきん」とも読み、金を必要に応じて切り枠にかけて使用した貨幣です。

（以上『広辞苑』より）

今月のはてな?

昇汞水（しょうこうすい） 6
新粧（しんそう） 20
熾火（おきび） 34
法面（のりめん） 〃
楪（ゆずりは） 40
泥濘（ぬかるみ） 52
湾刃（のたれば） 56
御衣黄（ぎょいこう） 57
大神神社（おおみわじんじゃ） 〃

頁

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和五年四月号

通巻一一一一号

令和五年四月一日発行

発行所　水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二

電話　048−822−四七四一

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円

一年分　一二、〇〇〇円

同人費（誌代を含む）

一年分　二四、〇〇〇円

季音同人費（誌代を含む）

一年分　三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三

発行人　山本鬼之介

印刷所　中央美版

水明全国大会投句用紙

☆投句締切　四月二十五日（必着厳守）

句　数　通じて二句（一組）　・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
　　・組数は制限しない。
出句料　一組につき　一、〇〇〇円（同封）
用　紙　足りないときは、コピーも可。

きりとりせん

「更衣」（ころもがへ）
「竹の秋」（たけのあき）
「金」詠込み
※71頁参照の事

兼　題

都市又は府県名	姓並びに俳名

きりとりせん

「更衣」（ころもがへ）
「竹の秋」（たけのあき）
「金」詠込み
※71頁参照の事

兼　題

都市又は府県名	姓並びに俳名

水明全国大会投句用紙

☆投句締切　四月二十五日（必着厳守）

句　数　通じて二句（一組）　・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
　　・組数は制限しない。
出句料　一組につき　一、〇〇〇円（同封）
用　紙　足りないときは、コピーも可。

きりとりせん

「更衣」（ころもがへ）
「竹の秋」（たけのあき）
「金」詠込み
※71頁参照の事

兼　題

都市又は府県名	姓並びに俳名

きりとりせん

「更衣」（ころもがへ）
「竹の秋」（たけのあき）
「金」詠込み
※71頁参照の事

兼　題

都市又は府県名	姓並びに俳名

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

題

季音 雪 月 花

六月号 四月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

き り と り せ ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

七月号　四月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

七月号　四月二十五日締切

氏名（俳号）

四月の兼題「風車」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

城址の錆し鉄鎖や冴返る　田寺玲子
俎はタンゴのリズム春立つ日　十倉和子
夫婦して酔ふ粕汁の夜は更けて　永野史代
立春の柱を磨くぬか袋　西山貴美子
ハミングで閉づる楽譜や春浅し　波多野寿子
待ち合はすホームの端や余寒なほ　星野和葉
月朧「チエミ」のさのさ口遊む　森本早苗
実朝忌彼の日のままに段葛　梅澤佐江
あぢけなやひと日限りの春の雪　松井由紀子
引鶴や帰心叶はぬ紙の鶴　荒井倶子
機音のくぐもるリズム春浅し　丸山マスミ
樹木医の大き手と耳春隣　内田恵子
覇者眠る丘を彩る犬ふぐり　原田秀子
ひと潜りしても変はらぬ鴨の顔　曲淵徹雄
颯爽と少年剣士竜の玉　保坂翔太
春落葉今だ残りし長屋門　笹本啓子
早春の海を車窓に画学生　野田静香
薄氷や人差指のいたづらに　河野はるみ

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

雪下駄に赤き爪革白き足袋　梅澤輝翠
冬深しいよよ火の入る登り窯　越田栄子
築山に伍する身の丈枯尾花　菅原卓郎
田に一羽ナルシストめく寒鴉　清水桂子
大木に黒花咲かす寒鴉　新暦文
虎落笛枕の下の瀬音かな　向井章子
そこにのみ優しき陽ざし福寿草　元田亮一
煤けたる大黒天と年迎ふ　池田珪子
雪折の松に思案の老庭師　山岸久美子
丸帯をぽんと叩いて寒見舞　篠﨑紀子
伊勢海老や腰曲げ易く反り難し　小林京子
冬木立その生き様の美しきかな　菅原真理
初芝居ひときは麗しき役者　丸屋詠子
餅焼いて武勇伝をも膨らます　横山君夫
雪催ひ雁字搦めで眠れぬ夜　渋谷きいち
妙齢に席を譲られ初電車　染谷風子
初明り牧場を駆くる放れ駒　反町修
陽の翳り影絵めく枝寒鴉　霜多光代

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和五年四月一日発行　毎月一日発行
（第九十六巻　第四号）　定価　一〇〇〇円